

2024 年 3 月

食料安全保障月報

(第 33 号)



令和 6 年 3 月 29 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年 6 月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月 1 回、月末を目処に公表します。

2024 年 3 月食料安全保障月報（第 33 号）

目 次

概要編

I	2024 年 3 月の主な動き	1
II	2024 年 3 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「米国の 2024 年の生産・輸出動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

	「ブラジル便り①：大豆・とうもろこしの生産現場から」	2 2
--	----------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の冬小麦は主産地で生育状況が改善
	＜カナダ＞	2024/25 年度の生産量は 34.6 百万トン(前年度比 8.3%増) (AAFC)
	＜豪州＞	2023/24 年度の実産量及び輸出量は 0.5 百万トン上方修正
	＜EU27＞	2023/24 年度の輸入量は史上第 1 位の 13.0 百万トン
	＜中国＞	2023/24 年度の輸入量は輸入ペースの低下を受け下方修正
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高の 51.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の輸出量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	収穫面積の増加等により、生産量は史上最高の見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の実産量は高温乾燥により減少
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の実産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の実産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 29.9%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2 月の降雪で 2024 年の中・短粒種向け灌漑用水源が補給

- <インド> ラビ米の生育は良好、田植えは2月末までに概ね終了
- <中国> 温暖な気候により広東省等で早稲の播種が進む
- <タイ> 乾季米は灌漑用水不足や高温等から減産見込み
- <ベトナム> 南部メコンデルタ地域の冬春作（乾季米）の単収は海水侵入で減少

II 油糧種子

- 大豆・・ 2 1
- <米国> 収穫面積の減少により、生産量は前年度より 2.5%減
- <ブラジル> 2023/24 年度の生産量(CONAB)は前年度より 5.0%減
- <アルゼンチン> 2023/24 年度の生産量は、前年度より倍増
- <中国> 2023/24 年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高
- <カナダ> 2024/25 年度の生産量は 6.9 百万トンの見込み(AAFC)

- (参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・ 2 7
- (参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7
- (参考3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・ 2 8

【利用上の注意】

表紙写真：アルゼンチンの収穫を待つとうもろこし（サンタフェ州 2024 年 2 月 27 日）
天候に恵まれ作柄は良好。

(概要編)

I 2024 年 3 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では収穫が終了した一方、南半球では、豪州で小麦の収穫が終了、南米で大豆等が生育期から収穫期を迎えている。

品目別にみると、3 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の影響を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。その後の黒海の臨時回廊からの輸出や EU 経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産見通しであるものの、米国や中国で史上最高の生産量となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、ブラジルや米国で減産見通しとなるものの、今後収穫期を迎えるアルゼンチンで増産見通しとなり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、引き続き注視する必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表している食料価格指数については、1 月の 118.2 から、2 月(最新値)は 117.3 と下落(参考:2023 年 2 月 129.7、2022 年 2 月 141.2、2021 年 2 月 116.4、2020 年 2 月 99.4)。

海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、直近 5 カ年の平均値より約 3 割高い水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて、2021 年 7 月に適用。

2024 年 3 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の3月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は、前月から変更なく2,340万トン（対前年度比9%増）。とうもろこしは収穫がほぼ終了し、生産量は前月から下方修正され2,950万トン（同9%増）。輸出量は黒海沿岸を通る臨時回廊からの輸出が増加し、小麦、とうもろこしとも前月から上方修正されそれぞれ1,600万トン（同7%減）、2,450万トン（同10%減）（参考1）。

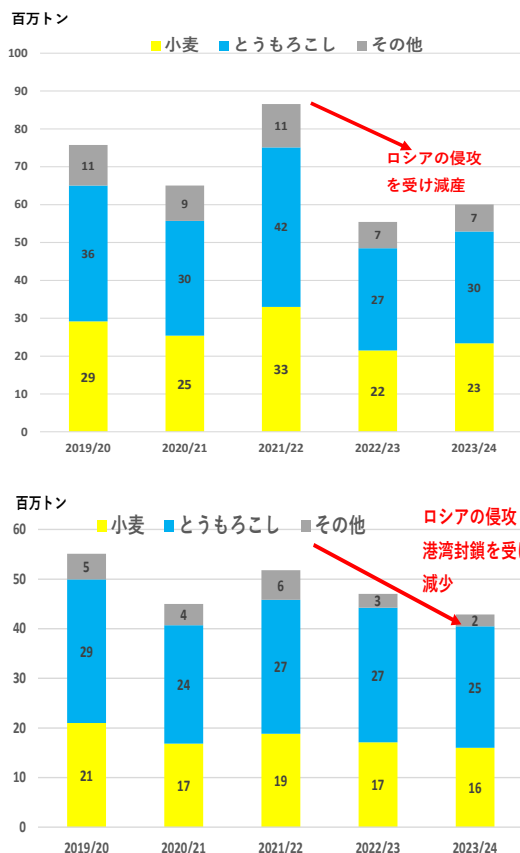
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024年産の春作物の作付けが開始され、3月7日時点で春小麦は4.3千ヘクタール作付けされた（前年同期6.7千ヘクタール）。とうもろこしは4月以降作付けが開始されるとみられる。

臨時回廊からの輸出増

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、穀物等3,283万トンが輸出されたが、2023年7月17日にロシアの離脱で履行が停止。

一方、代替輸出ルートとして、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通る臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。代替輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出量は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量は前年10月以降伸びているが、ロシアの侵攻や中東情勢の影響等引き続き注視が必要（参考2）。

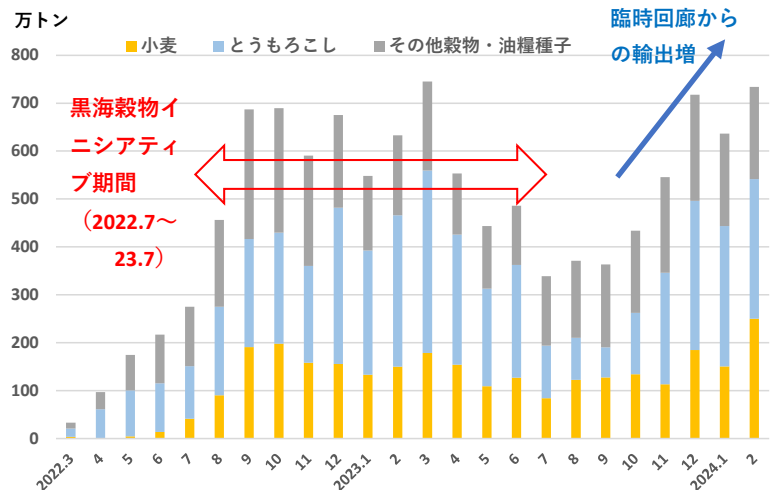
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2024. 3）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022. 3～24. 2）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。

1 ウクライナ：臨時回廊からの輸出が増加

前年7月の「黒海穀物イニシアティブ」の停止後、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU 経由の陸路等による代替輸出ルート of 拡充を試みてきた。ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約も課題となっている。このため、ウクライナはルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通る新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、前年8月以降「臨時回廊」の運用が開始された。

ウクライナの穀物・油糧種子の輸出に関し、「臨時回廊」を中心とした港湾からの輸出货量（一部ドナウ水路を利用したルーマニア経由の輸出含む）は7～9月に毎月230万トン前後で推移していたが、その後増加し12月は614万トン、本年1月は549万トンに減少も2月は638万トンまで回復し、同2月はウクライナの穀物輸出全体の9割弱まで比率が上昇した。

EU 向け輸出については、EU による東欧5か国向けのウクライナ産穀物輸入禁止措置が前年9月15日以降解除されたが、トランジットを除き、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは独自の輸入規制を継続している。一方、ルーマニアは前年10月13日、在庫の積増しなどに限定しウクライナ産穀物の輸入を許可した。ウクライナ産穀物等の流入に関し、ポーランド、スロバキア及びハンガリーでは農業団体やトラック運転手の反発が強く、前年11月6日以降、国境検問所の封鎖等の抗議活動が断続的に行われている。本年1月には農家の抗議活動がフランスやベルギーまで広がった。今のところ影響は陸路に限定され、臨時回廊中心のウクライナの輸出への影響は軽微。

東欧5か国の農相は1月15日、欧州委員会にウクライナ産穀物への輸入関税の賦課を求めたが、欧州委員会は3月20日、ウクライナ産農産物の一部品目のセーフガード等の緊急措置を含む免税措置の1年間延長で暫定合意したと公表した。ポーランドでは、特に農業者の反発は強く、ロシア産農産物の輸入にも反対しており、迂回輸入も含め他国との国境の多くで抗議活動が行われている。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討。

- 1 臨時回廊 ウクライナのオデーサ港など黒海港湾から、ルーマニア・ブルガリア沖経由で輸出
- 2 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
→ルーマニアのブカレストからウクライナ国境まで高速道路建設中。

コンスタンツァ港で従来施設を改修しウクライナ産農産物専用ふ頭の運用が3月以降予定。

- 3 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出
→グダニスク港をウクライナ産穀物の輸出向け港湾として整備することに合意。
- 4 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



（出典：France Agrimer 他より）

2 南米：2023/24 年度はブラジルは減産もアルゼンチンは増産見通し

ブラジル食料供給公社（CONAB）の3月見通し（2024. 3. 12）によれば、ブラジル中西部や南東部等での悪天候で特に大豆が影響を受け、2023/24 年度の穀物・油糧種子の生産量は対前年比 7. 6%減の 2 億 9, 559 万トンとなっている。このうち、収穫期を迎えた大豆の生産量は 1 億 4, 686 万トン（対前年度 5. 0%減）の見通し。また、とうもろこしは生産量全体の 8 割を占める冬作の作付けが開始されており、生産量は 1 億 1, 275 万トン（対前年度 14. 5%減）の見通し。

一方、アルゼンチンでは、3 月に入り降雨があり、生育期の大豆は土壌水分が補給され生育条件が改善されたが、収穫が開始されたとうもろこしは降雨を受けて収穫が遅れ気味となっている。ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2024. 3. 14）によれば、大豆の生産量は 5, 250 万トン（前年度比 150%増、対過去 5 年平均 24%増）、とうもろこしの生産量は 5, 650 万トン（前年度比 66%増、対過去 5 年平均 17%増）といずれも増加している。輸出税に関しては、ミレイ新政権誕生後、引上げの検討もされたが、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間、以前から変更はないものとみられる。

3 カナダ：2024/25 年度の小麦の作付面積は前年並み

カナダ統計局が 3 月 11 日に公表した 2024 年産に関し昨年末に約 9, 600 農家に対して実施した作付意向調査結果によれば、主にカナダ西部で栽培される小麦については、前年並みの 1, 095 万ヘクタールとなり、うち、デュラム小麦は、対前年比 5 %増の 257 万ヘクタールとなった。北アフリカや欧州からのデュラム小麦の輸入需要の増加が要因とみられる。また、菜種については同 3 %減の 866 万ヘクタールとなった。市場価格の低下に加え、生産資材コスト高などで小麦と比べて収益性が低いことが要因とみられる。

一方、カナダ東部で栽培される大豆は同 1 %減の 226 万ヘクタールとなった。搾油需要や輸出需要は堅調も市場価格の下落により作付け意欲が減少したことが要因とみられる。一方、とうもろこしは同 2 %増の 157 万ヘクタールとなった。作付けは冬小麦を除いて雪解けを待って 5 月以降開始されるとみられる。

II 2024 年 3 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2 月末、210 ドル/トン台前半で推移。3 月に入り、安価なロシア等の黒海産小麦の潤沢な供給や中国の輸入契約の取消しを受け、190 ドル/トン台前半に値を下げた。その後、価格の下がり過ぎ感からの買戻しで 190 ドル/トン台後半に値を上げたものの、輸出が低調なことから、3 月中旬現在、190 ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、2 月末、160 ドル/トン台前半で推移。3 月に入り、売られ過ぎからの買戻しから 160 ドル/トン台後半まで上昇。その後、ブラジル食料供給公社（CONAB）の生産見通しの下方修正を受け上昇したものの材料に乏しく、3 月中旬現在、160 ドル/トン台後半で推移。

コメは、2 月末、630 ドル/トン台後半で推移。3 月に入り、乾季米の市場への流入が続いているものの、インドネシア政府の入札が 4 日に成立したこと（タイ及び一部パキスタンから約 30 万トン）や、3 月末にインドネシア政府が再び入札を行う可能性があるとの市場の予測等から値を上げ、3 月中旬現在、640 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、2 月末、410 ドル/トン台半ばで推移。3 月に入り、米国の好調な週間輸出成約高や米国農務省の穀物需給報告での期末在庫量が市場予想を下回ったことや、ブラジル食料供給公社（CONAB）の生産見通しの下方修正を受けて上昇し、3 月中旬現在、430 ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 2.2% 増の 28.09 億トン。消費量は、前年度より 1.8% 増の 28.14 億トン となり、3 年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は前年度を下回り 27.5% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.09 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.14 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、コメで減少も、とうもろこしで増加し、穀物全体で増加し、5.08 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.75 億トンと前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

（注：数値は 3 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.59 億トン。消費量は前年度を上回り 6.44 億トン となり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 20.4% となる見込み。

（注：数値は 3 月の USDA「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：米国の2024年の生産・輸出動向

米国の2023/24年産の生産量は、大豆は減少となった一方、とうもろこしは史上最高、小麦も1割増となった。とうもろこしの輸出量はブラジルを抜いて世界第1位に返り咲いたものの、小麦及び大豆の輸出は伸び悩んでいる。2月の農業アウトルックフォーラムの見通しでは、2024/25年度は需給が緩和し、期末在庫率は3品目とも前年度を上回る見通し。最近の米国の生産・輸出動向をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、米国の小麦は2023年6月から2024年5月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 2023/24年産：とうもろこし生産量は史上最高

(1) 小麦

米国農務省(USDA)によれば、2023/24年度の小麦の生産量は、過去2年間と比較して干ばつ被害が限定的であったため、対前年度比9.8%増の4,931万トンとなったものの、過去10年平均(5,227万トン)を5.7%下回っている。なお、2021/22年度の生産量は春小麦、2022/23年度の生産量は冬小麦がそれぞれ干ばつの影響を受け2002/03年(4,371万トン)以来の低水準であった。

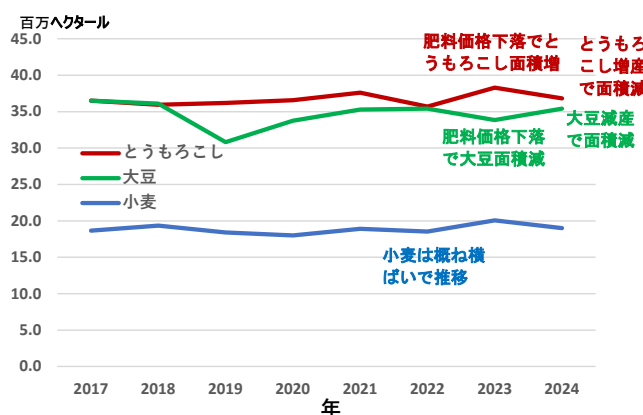
(2) とうもろこし

2023/24年度のとうもろこしの生産量は、史上最高の3億8,969万トン(対前年度比12.4%増)となった。天候に恵まれ史上最高の単収(11.13トン/ヘクタール)となったことに加え、肥料価格の下落等を受け、大豆等他作物と比較し肥料投入量の多いとうもろこしへ作付けがシフトしたことにより収穫面積が9.9%増加したことも背景にあるとみられる。

(3) 大豆

2023/24年度の大豆の生産量は、前年度比2.5%減の1億1,334万トンとなった。天候に恵まれ単収が向上したものの、肥料価格の下落に伴い、単収の高いとうもろこし等へ作付けがシフトし、収穫面積が4.4%減少したことが要因とみられる。

図1 米国の小麦、とうもろこし、大豆の作付面積の推移



出典：米国農務省「農業アウトルックフォーラム」による。

2 2024/25年産：小麦、とうもろこし及び大豆いずれも需給緩和の見通し

(1) 小麦

2月15日にUSDAが農業アウトルックフォーラムで公表した2024年の小麦の作付面積は前年度比5.2%減の1,902万ヘクタールとなる見込みであるものの、前年度より単収が上昇することを受け、生産量は、5,171万トン(前年度比4.9%増)と増産になる見通し。増産に伴い輸出量は増加するものの、消費量は減少する見通し。この結果、期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率は前年度から5.1ポ

表1 米国の2024/25年度需給見通し(小麦)

(単位：百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.91	49.32	51.71	4.9
消 費 量	30.43	31.14	30.86	▲ 0.9
うち飼料用	2.10	3.27	2.99	▲ 8.3
輸 出 量	20.66	19.73	21.09	6.9
輸 入 量	3.32	3.95	3.27	▲ 17.2
期末在庫量	15.51	17.91	20.93	16.9
期末在庫率	30.4%	35.2%	40.3%	5.1
(参考)				
収穫面積(百万ha)	14.37	15.10	15.54	2.9
単収(t/ha)	3.13	3.27	3.33	1.9

資料：USDA「Agricultural Outlook Forum」(2024.2.15)

イント上昇し、4年ぶりに40.3%と40b%台に回復する見通し。

(2) とうもろこし

作付面積は3,683万ヘクタール（同3.8%減）と減少するものの、単収が11.36トン/ヘクタールと過去最高の前年度からさらに増加することから、生産量は3億8,203万トン（同2.0%減）と、前年度より減少も、史上3位に相当する高水準となる見通し。消費量は、飼料用及びバイオエタノール用ともに増加する見通し。輸出量も増加するものの、生産量が引き続き高水準なことから期末在庫量は大きく増加し、期末在庫率は前年度より2.3ポイント上昇し、17.2%となる見通し。

(3) 大豆

作付面積は3,541万ヘクタール（同4.7%増）の見通し。生産量は、単収が増加することから過去最高の2021/22年度（1億2,150万トン）を上回る1億2,261万トン（同8.2%増）となる見通し。

バイオ燃料向け需要が堅調なことから消費量が増加し、輸出量も供給増により増加する見通し。ただし、生産量が消費量及び輸出量の合計を上回ることから、期末在庫量は大きく増加し期末在庫率も前年度より2.3ポイント増の9.9%と回復する見通し。

表2 米国の2024/25年度需給見通し（とうもろこし）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生 産 量	346.75	389.70	382.03	▲ 2.0
消 費 量	305.96	316.37	318.91	0.8
うち飼料用	139.38	144.15	146.06	1.3
エタノール用等	131.48	136.53	137.17	0.5
輸 出 量	42.19	53.34	54.61	2.4
輸 入 量	0.99	0.64	0.64	-
期末在庫量	34.55	55.17	64.32	16.6
期末在庫率	9.9%	14.9%	17.2%	2.3

（参考）

収穫面積(百万ha)	31.85	35.01	33.63	▲ 3.9
単収(t/ha)	10.89	11.13	11.36	2.0

資料：USDA 「Agricultural Outlook Forum」 (2024. 2.15)

表3 米国の2024/25年度需給見通し（大豆）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生 産 量	116.21	113.35	122.61	8.2
消 費 量	62.95	65.97	68.72	4.2
うち搾油用	60.20	62.60	65.32	4.3
輸 出 量	54.21	46.81	51.03	9.0
輸 入 量	0.68	0.82	0.41	▲ 50.0
期末在庫量	7.19	8.57	11.84	38.1
期末在庫率	6.1%	7.6%	9.9%	2.3

（参考）

収穫面積(百万ha)	34.88	33.35	35.05	5.1
単収(t/ha)	3.33	3.40	3.50	2.9

資料：USDA 「Agricultural Outlook Forum」 (2024. 2.15)

3 伸び悩む米国の輸出と堅調な国内バイオ燃料需要

(1) 伸び悩む穀物輸出

米国の最近15年間の穀物貿易の動向を振り返ると、2011/12年度までは、小麦、とうもろこし、大豆いずれも米国が世界最大の輸出国であった。しかし、とうもろこしや大豆のシカゴ相場の価格が史上最高値を記録した2012/13年度の大干ばつを境に、2022/23年度までに小麦、とうもろこし及び大豆いずれの輸出量ともトップを譲ることとなった。代わって台頭してきたのが、小麦におけるロシア、とうもろこし・大豆におけるブラジルである。農業アウトLOOKフォーラムでは米国の穀物・大豆輸出はいずれも前年度より増加すると見通されている。他方で、15年前と比較すると、世界の小麦、とうもろこし及び大豆の輸出量はそれぞれ1.6倍、2.1倍、1.9倍と伸びているものの、米国の当該品目の輸出量はそれぞれ0.8倍、1.1倍、1.1倍と伸び悩んでいる。

一方、例えば、とうもろこしで見ると、2022年以降ロシアの侵攻を受けているウクライナや2022/23年度に60年ぶりの干ばつを経験したアルゼンチンも15年前と比較すると、輸出量がそれぞれ4.8倍、2.5倍増加している。

(2) 堅調な国内バイオ燃料需要

一方、米国では国内での穀物需要の伸びが目立っており、特に堅調なのがバイオ燃料需要で

ある。とうもろこしのバイオ燃料需要は、新型コロナの感染拡大期に、経済活動の縮小や自動車での外出が減少したこと等から一時減少したが、その後、新型コロナの影響の緩和に伴い経済活動が回復したことから増加に転じた。

また、近年、ジェット燃料（SAF）向けに大豆油が使用されており、2023年12月に政府がSAFの税額控除の対象をとうもろこし由来のバイオ燃料にも拡大したことなどを背景に、2024/25年度の大豆の搾油需要は対前年度比4.3%増、とうもろこしもバイオ燃料需要は0.5%増の見通し。バイオ燃料では地産地消の動きも進んでおり、例えば、コーンベルト西部のネブラスカ州では、隣接するコロラド州のデンバー空港向けにとうもろこし由来のバイオ燃料供給を計画している。

なお、欧州などで普及が進んでいる電気自動車（EV）については、米国では中西部などで長距離を移動する際の充電スタンドの整備が遅れていることや、バッテリーに係る寒冷地での冬季の対応が難しいことなどから都市部を除いて普及が進みにくいといった見方もあり、当面の間、自動車や航空機向けなど交通機関向けのバイオ燃料需要は堅調とみられる。

4 米国の輸出競争力は低下傾向

（1）小麦

世界の小麦需要増に伴い、特に中近東や北アフリカで輸出シェアが伸び、輸出量は15年前と比較すると2.7倍の5,100万トンとなったロシアを始め、EU、カナダ、豪州にも抜かれ、米国の輸出量は現在世界第5位となっている。

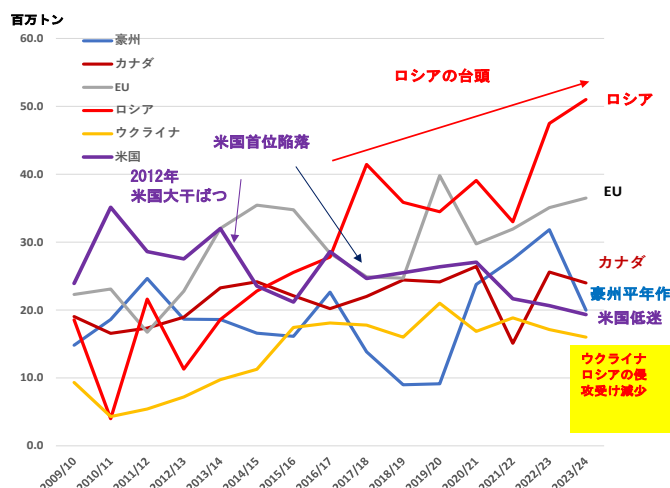
2023年12月に中国が米国産小麦の大量買い付けを行ったが、3月にその一部がキャンセルされた。この結果、米国の小麦輸出量については3月見通しで41万トン下方修正され1,932万トンとなり1971/72年以来の低水準となった。

（2）とうもろこし

2021/22年度まで米国が圧倒的な生産量で、輸出シェアも優位に立っていたが、2022/23年度、ブラジルのとうもろこしの増産と中国のブラジル産輸入開始に伴い、輸出量第1位の座をブラジルに明け渡した。

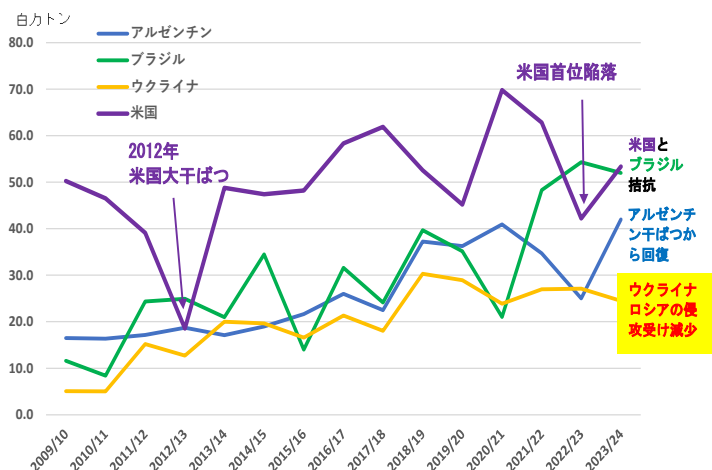
2023/24年度は米国が史上最高の豊作となった一方、ブラジルの減産見通しから輸出量が減少し、わずかながら米国の輸出量が上回り、米国の輸出量は5,334万トンとなり世界第1位の輸出国に回り咲く見通しである。今後は米国とブラジルの両国でシェアが拮抗していくとみられる。

図2 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.3）による。

図3 主要とうもろこしの輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.3）による。

(3) 大豆

2023/24 年度のブラジル産の収穫が開始され、主産地のマツグロソ州の乾燥の影響により前年度より減産となるものの、最近における鉄道といった輸出インフラの整備等が進んでいることで輸出競争力が引き続き強いことから、ブラジルの輸出量見通しが3月見通しで上方修正され、1億300万トンとなった。15年前は米国産の輸出シェアが高かったものの、その後、米国産の輸出量はほとんど変動していない。世界の大豆輸入シェアの6割近くを占める中国は、リスク回避のため輸入多角化の一環として輸出港等インフラへの投資などを背景にブラジル産輸入を増加させたことから、ブラジルの輸出量が大幅に増加し、2012/13年度以降、米国はブラジルに次ぐ世界第2位の輸出国となっている。

(4) 国際穀物価格への影響

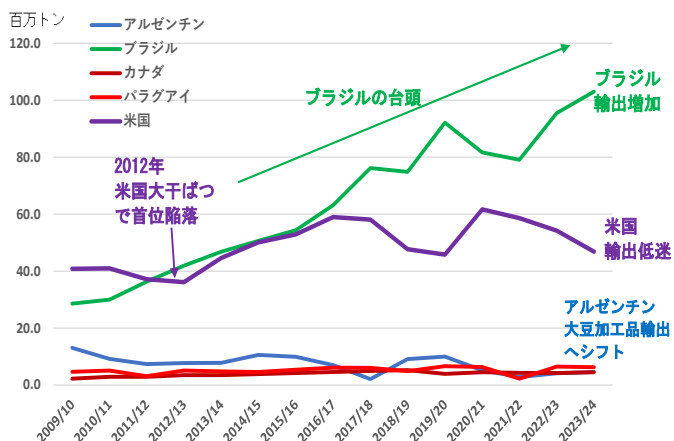
こうした米国産の近年における輸出競争力の低下に加え、ブラジルの大豆収穫やアルゼンチンの豊作見通しを受け、本年に入りシカゴの穀物相場は下落傾向で推移し、2月に入り、大豆が12ドル/ブッシェルを割り、とうもろこしも2月下旬に一時4ドル/ブッシェルを割り込み、いずれも新型コロナの感染拡大期の2020年11月以来の水準まで下落した。小麦についても、中国による米国産輸入のキャンセルを受け、3月上旬には2020年8月以来の5ドル20セント/ブッシェル台まで下落した。

米国農家のとうもろこしと大豆の作付選択に際し、作付時期の大豆相場の価格をとうもろこし相場の価格で割った「比価」が参考指標の一つとなっており、①比価が2に近ければ単収の高いとうもろこしを植えた方が有利、②比価が3に近ければ高値で取引される大豆を植えた方が有利といわれている。

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻以降、とうもろこしがウクライナの輸出品目であること等も背景に、期近もので算出した比価はとうもろこしが優

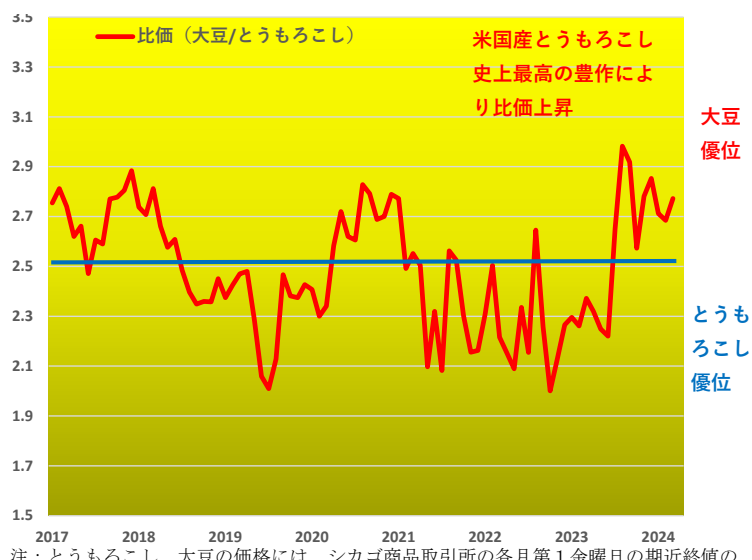
位の2.2~2.3の範囲で推移し、2023年は米国のとうもろこしの作付面積が増加し、大豆の作付面積は減少した。こうした中で、2023年の秋以降、米国産とうもろこしが史上最高の豊作となった一方、大豆が減産となったことを受け、比価は2.7~2.8まで上昇した。現在のところ大豆が優位のため、大豆の作付けが増えるとの見方もある。3月28日、USDAから米国農家の作付意向調査結果が報告される。米国の作付け動向が国際穀物需給や相場に与える影響は引き続き大きいこともあり状況を注視していく必要がある。

図4 主要大豆輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.3)による。

図5 最近8年間のシカゴ相場の比価（大豆/とうもろこし）の推移

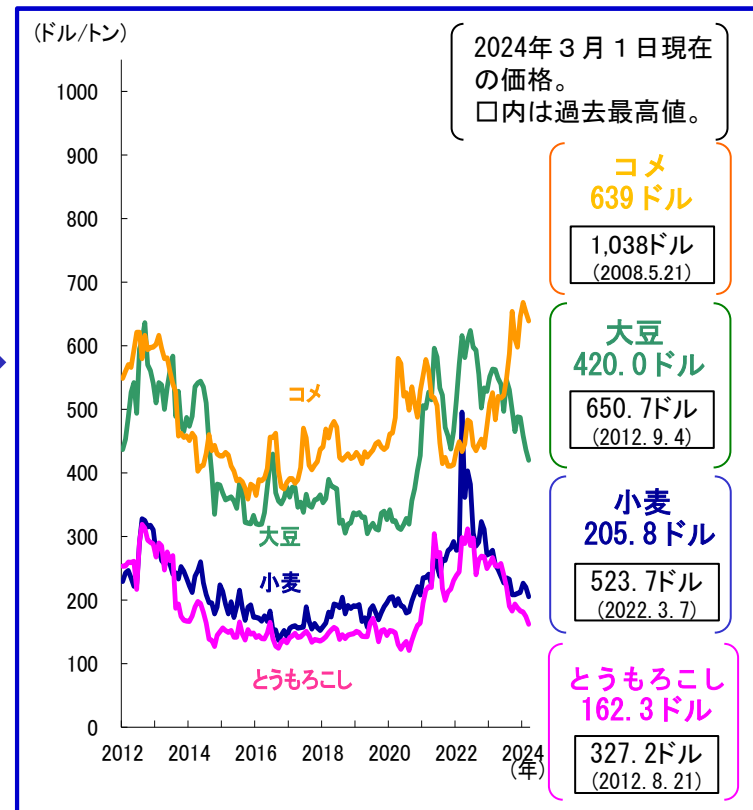
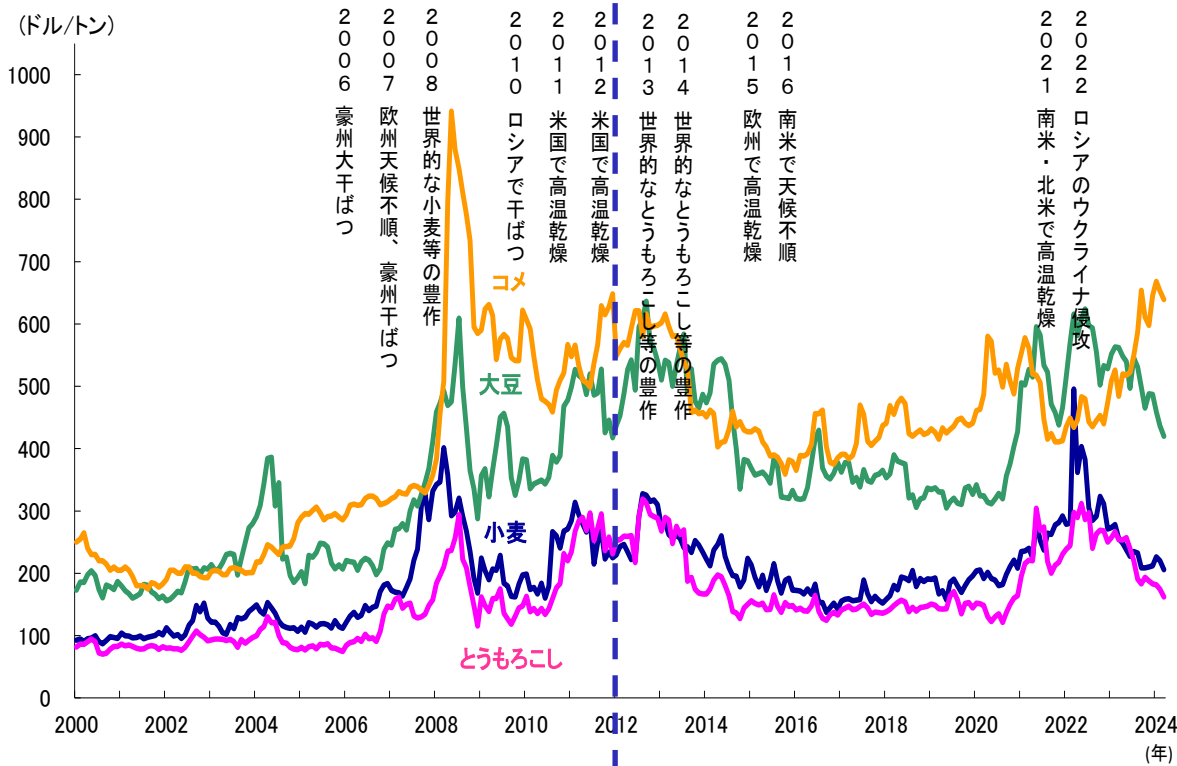


注：とうもろこし、大豆の価格には、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）を用いた。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

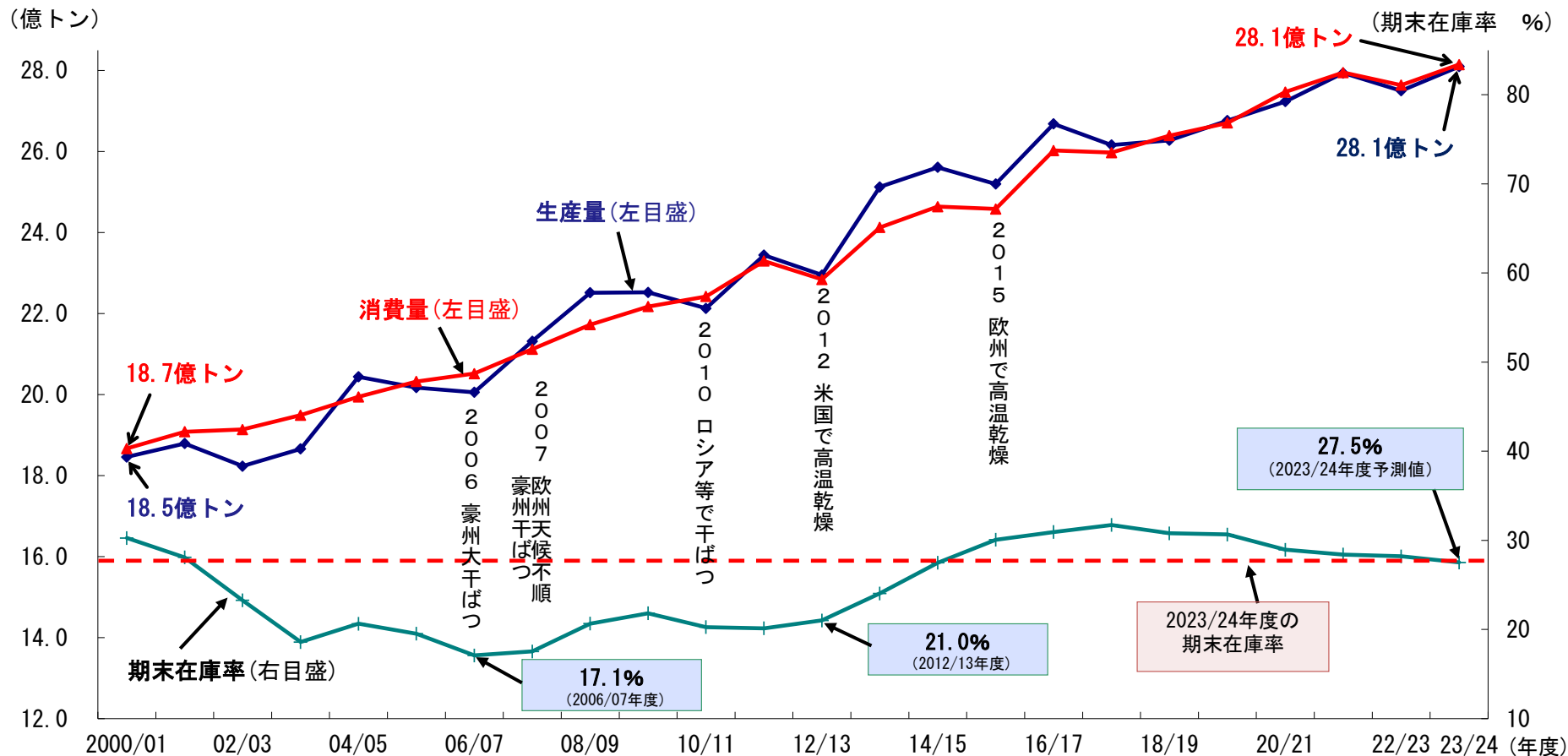
なお、コメ価格は2024年2月28日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

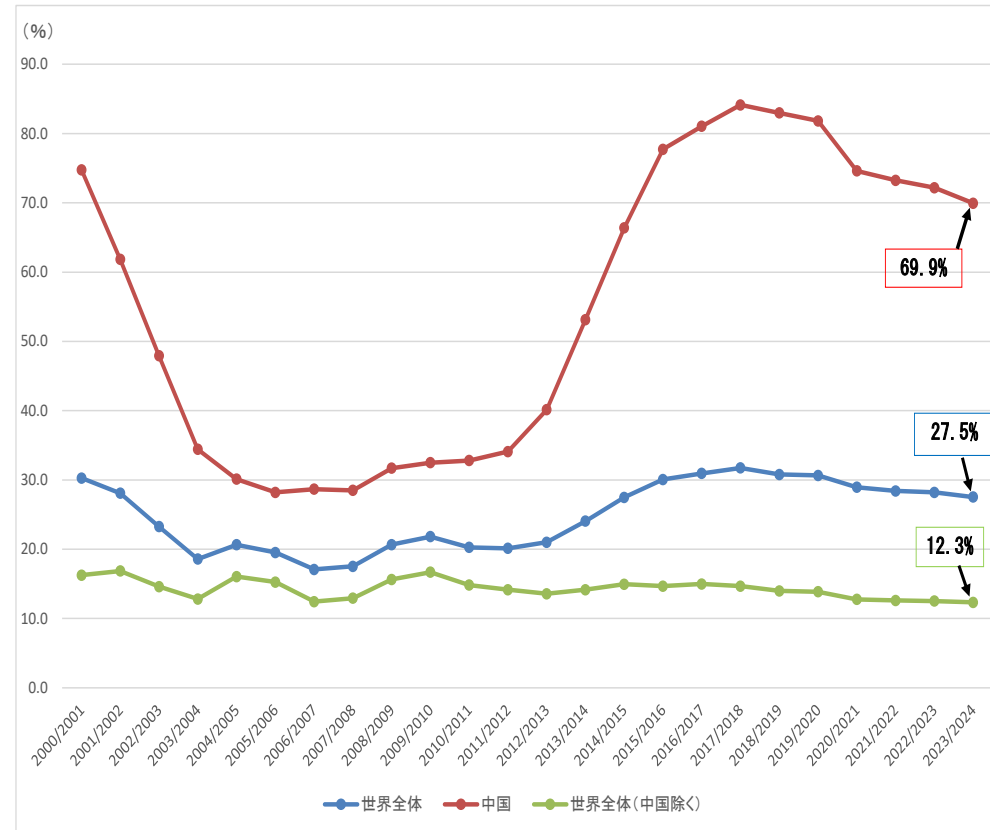


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(March 2024)、「PS&D」

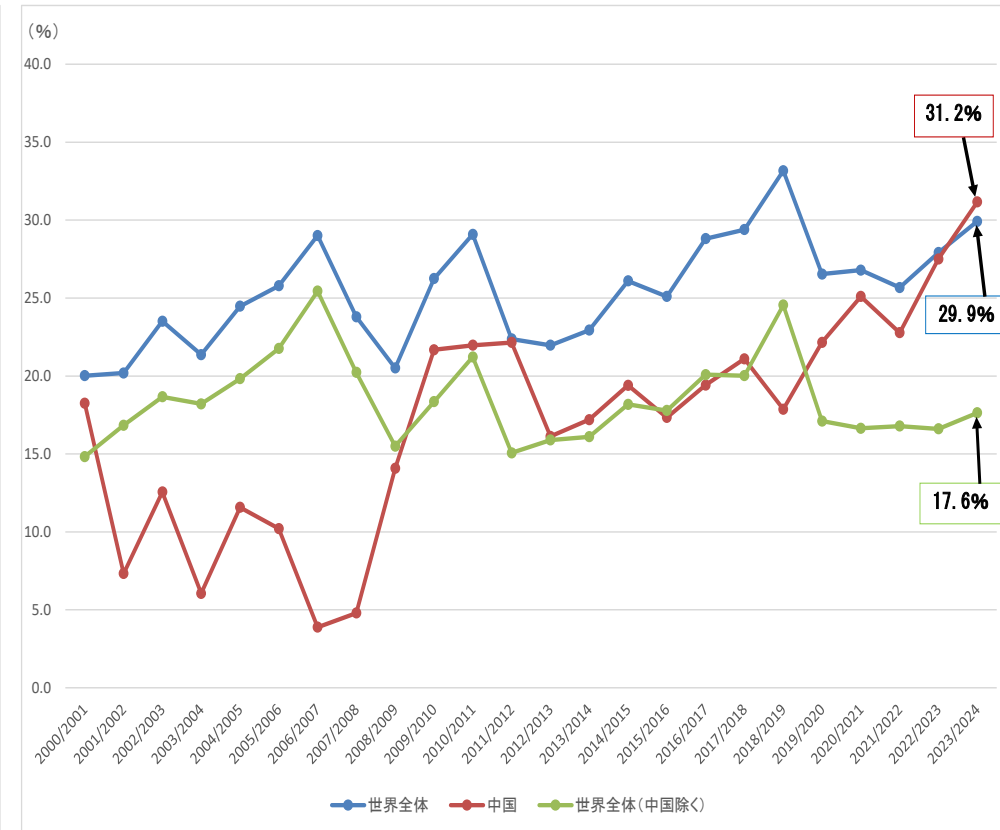
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 8, 2024)

注: 1) 穀物とはとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

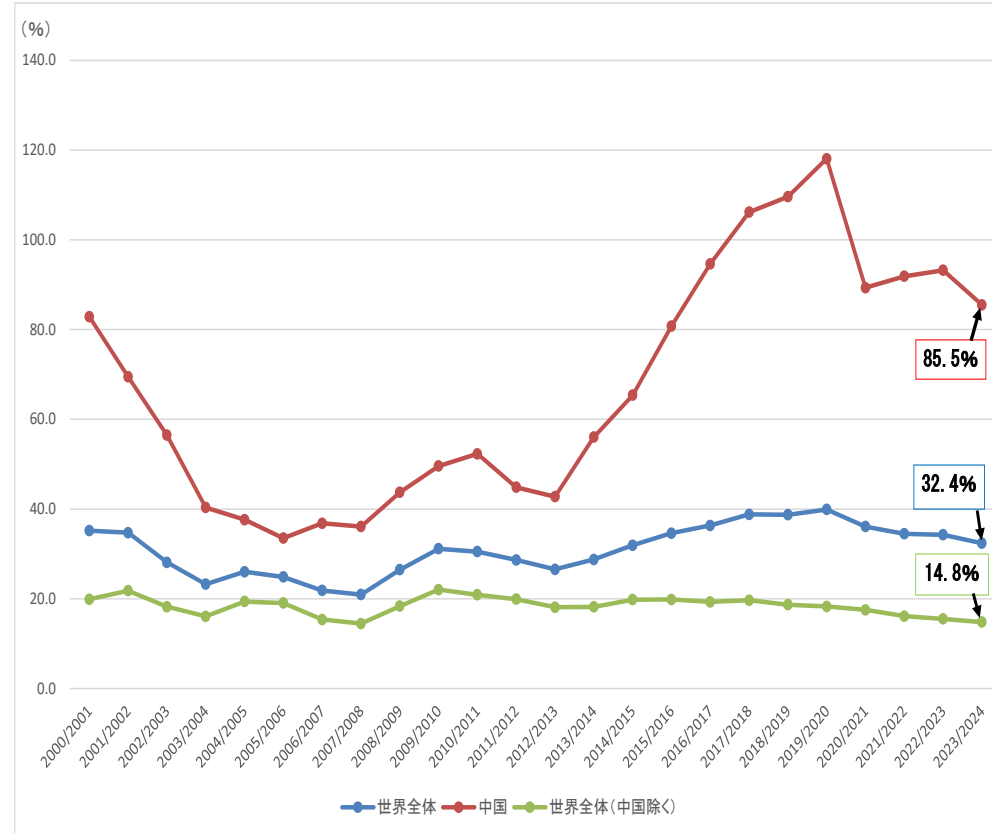
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

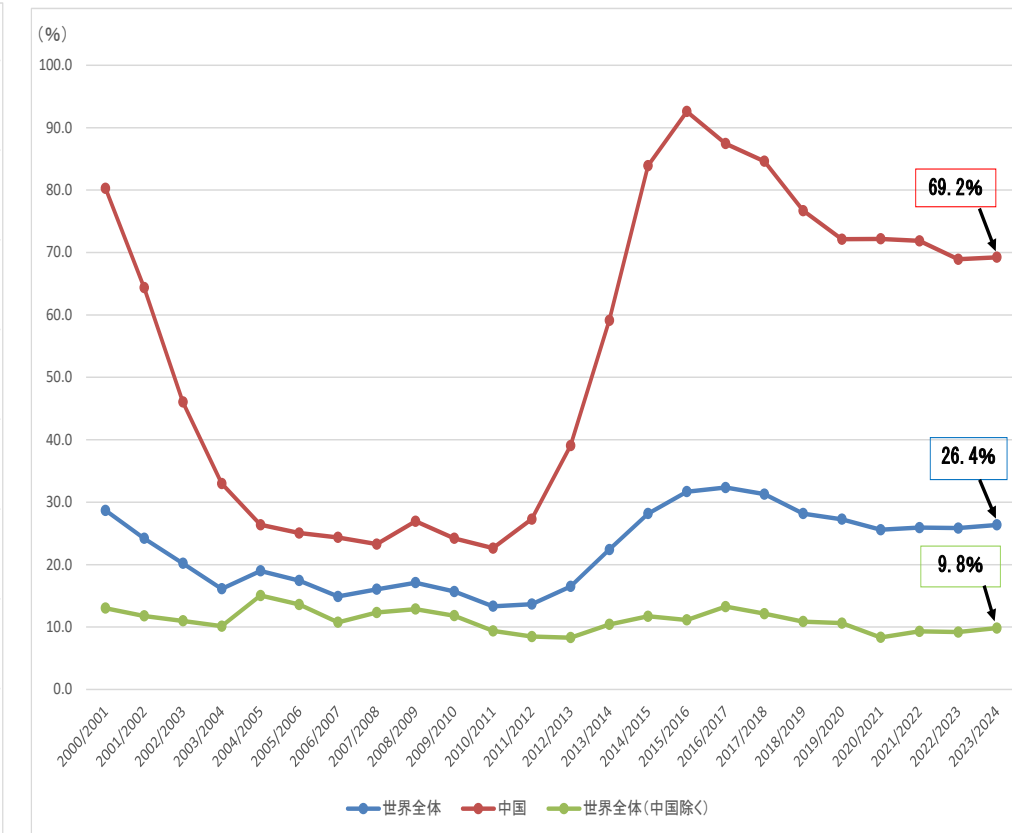
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料:米国農務省「PS&D」(March 8, 2024)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

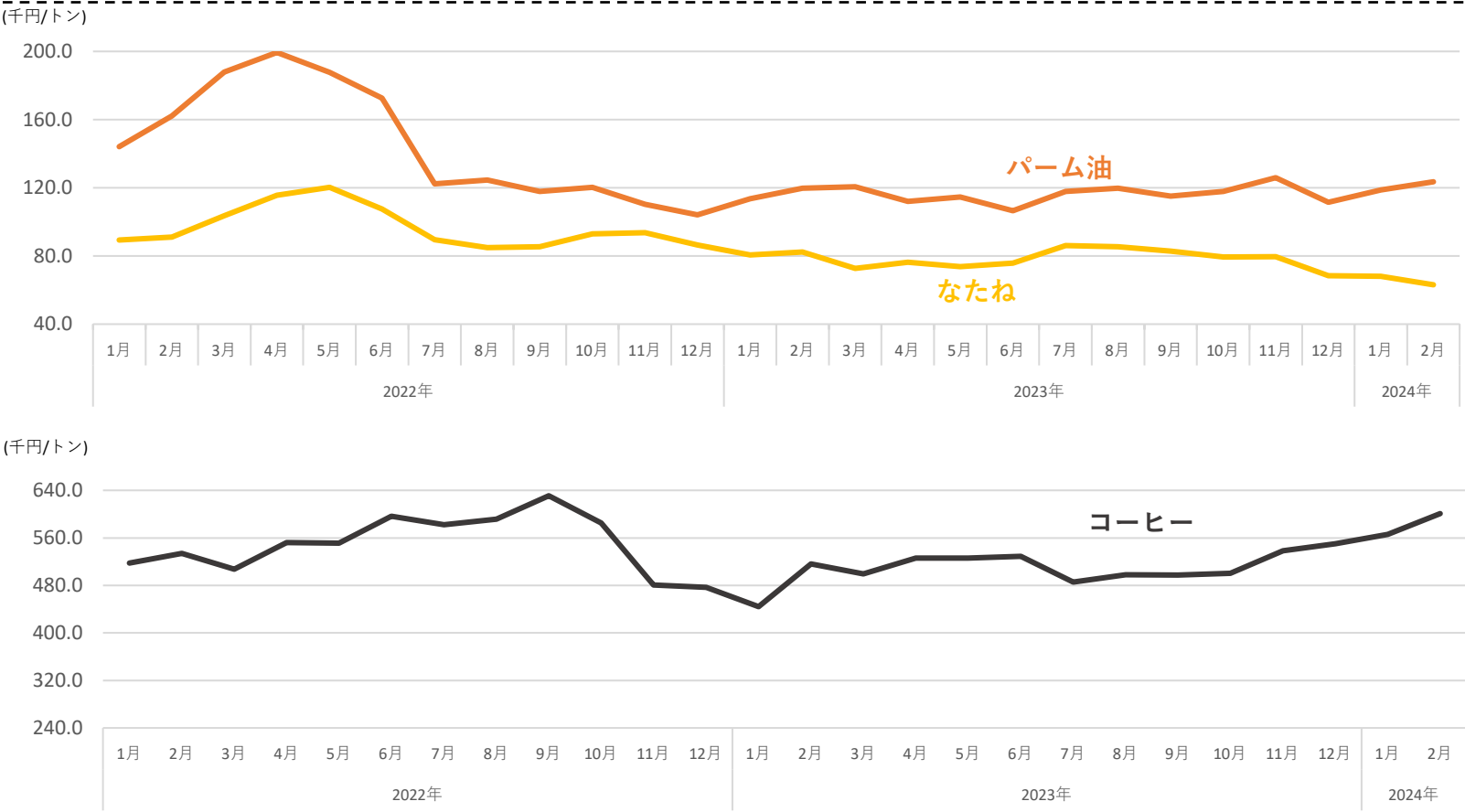
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、2021年に主産地であるカナダで減産があったが、2022年以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（2022年5月23日解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも2022年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面では、従来はアメリカやヨーロッパが消費の中心であったが、近年は中国やインドといった人口の多い国での消費の拡大等により、コーヒー消費量が増加したことを受け市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2024年3月20日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
123.7千円/トン

199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
63.1千円/トン

120.3千円/トン
(2022.5)

コーヒー
601.1千円/トン

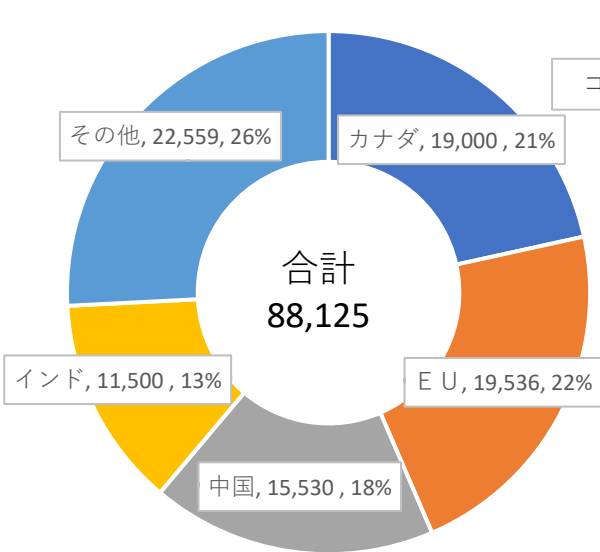
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

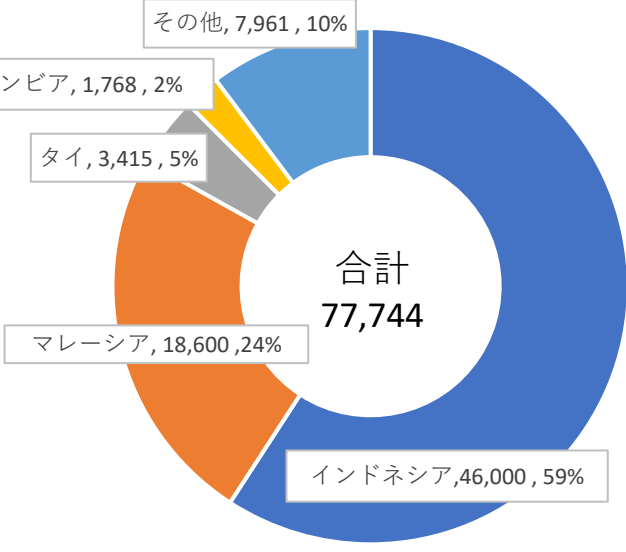
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



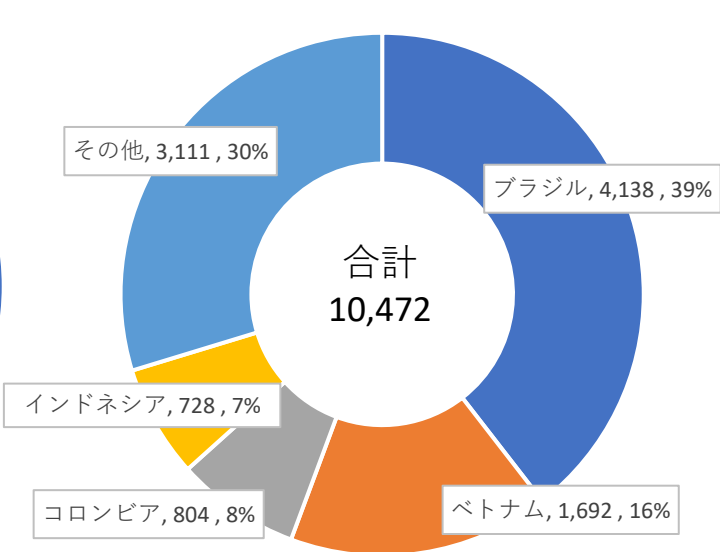
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～
0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1										
前月比	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5										
前年同月比	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7										
前月比	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2										
前年同月比	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1										
前月比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2										
前年同月比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年2月の国内の加工食品の消費者物価指数は112.6～154.2（前年同月比で-7.7%～20.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年9月～令和6年2月）

消費者物価指数（総務省）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6		
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	122.5	122.7	123.2	122.7	122.1	121.8	6.0%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	123.3	125.7	122.9	122.2	122.2	125.2	9.2%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	116.3	117.2	117.0	117.2	116.9	117.5	6.4%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	157.7	156.6	154.8	153.2	152.8	151.3	-7.7%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	108.8	110.8	111.4	111.0	111.5	112.6	6.3%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	154.7	154.2	153.9	154.7	153.5	154.2	12.4%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	135.0	135.2	135.0	131.3	133.0	132.7	9.3%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	111.5	111.6	111.3	115.5	119.0	119.1	20.8%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	114.3	114.8	115.2	115.1	115.0	115.1	5.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年9月～令和6年3月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	118.2	118.0	117.1	118.6	117.6	117.4	118.6	1.0%	6.6%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	121.6	122.2	122.2	121.6	119.8	121.0	121.0	0.0%	9.4%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.1	114.6	114.1	114.6	114.6	114.6	115.0	0.3%	4.4%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	158.7	156.8	155.5	153.3	153.3	151.4	150.5	-0.6%	-7.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.6	109.4	110.0	110.6	110.2	110.4	110.2	-0.2%	6.4%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	144.1	144.8	143.7	143.7	144.1	144.4	143.4	-0.7%	10.1%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.7	130.3	130.7	122.3	125.8	128.8	129.8	0.8%	10.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	110.7	111.4	110.5	115.0	118.3	118.5	118.5	0.0%	20.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年4月号（3月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）23年の牛肉輸出量、前年比14.3%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003167.html

（豪州）23年第4四半期、雌牛の保留などだと畜頭数と牛肉生産量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003168.html

（アルゼンチン）23年の牛肉生産量、肉用牛と畜頭数は干ばつの影響で前年比増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003169.html

◆豚肉

（米国）23年の豚肉輸出量は前年比7.5%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003170.html

（EU）豚肉生産量の減少が続き、枝肉価格は高値を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003171.html

（中国）豚肉価格の低迷を背景に繁殖雌豚頭数は適切な水準に近づく

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003172.html

◆牛乳・乳製品

（EU）23年の生乳出荷量は前年並み、主要乳製品生産量は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003176.html

（豪州）23/24年度上半期の生乳生産量、前年同期を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003177.html

（NZ）GDT平均価格が続伸、23/24年度の生産者支払乳価は引き上げへ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003178.html

※GDT価格…グローバルデイリートレード価格

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）ブラジルのトウモロコシ生産量は下方修正も、世界の生産量は過去最大の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003185.html

（世界：大豆）ブラジルの大豆生産は下方修正も、期末在庫は引き続き前年度増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003186.html

（米国）米国のトウモロコシ生産、輸出量は大幅増も、生産者平均価格は下落見込み

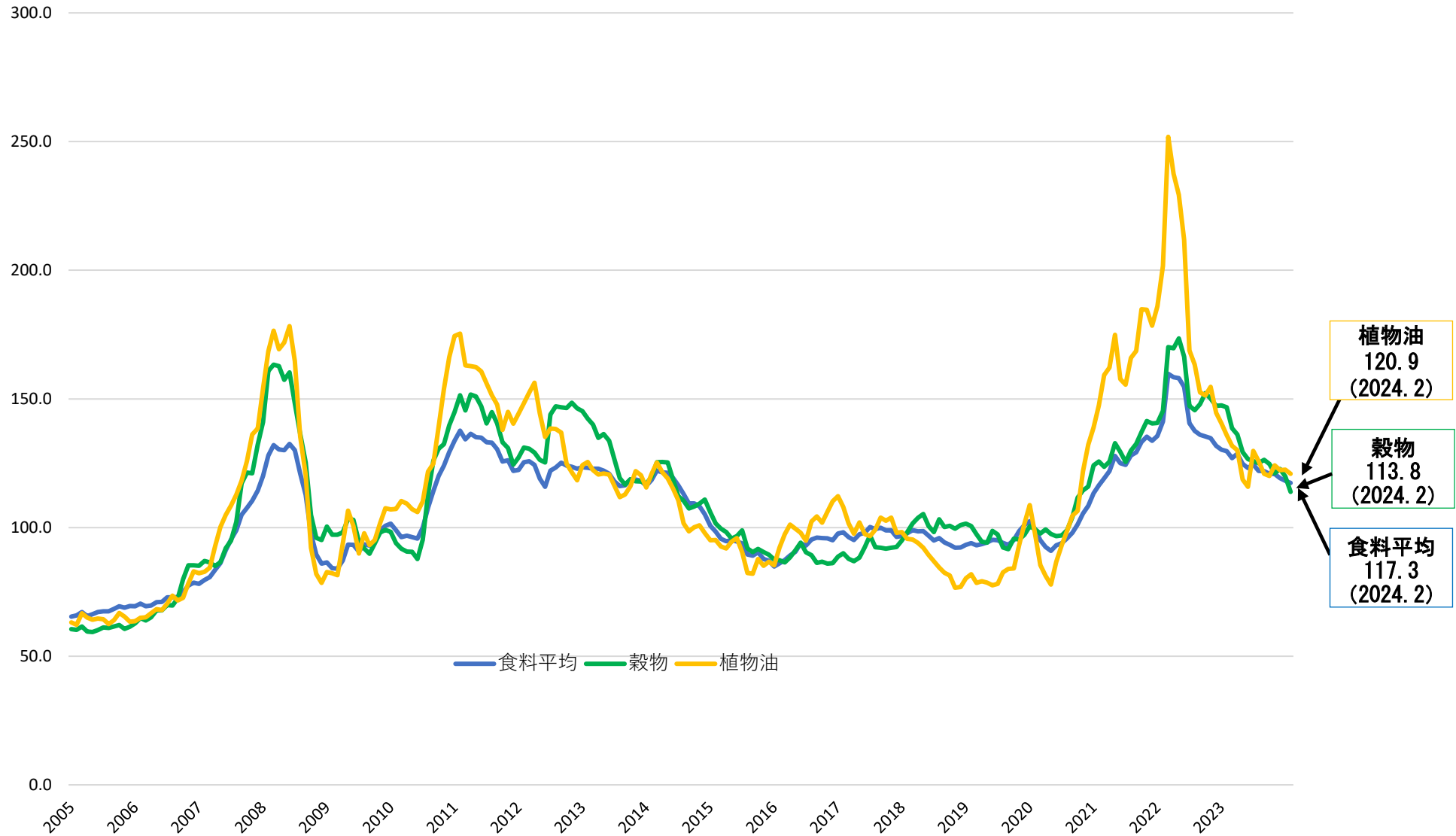
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003187.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003188.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.3)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

ブラジル便り①：大豆・とうもろこしの生産現場から

読者の皆様は、ブラジルの農産物といえば、何をイメージされるでしょうか？

多くの方は、コーヒー豆とさとうきびをイメージされるのではないのでしょうか。ただ、近年は大豆・とうもろこしの増産が進み、これらの輸出量は世界第1位となっています。今回、ブラジル大豆・とうもろこしの主要な生産地であるマツト・グロッソ州を訪問した話を中心にご紹介したいと思います。

1. ブラジルは農業大国

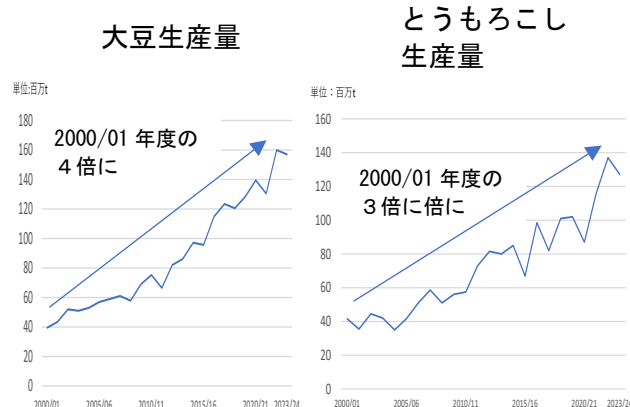
USDAによれば、2023/24年度の生産量について、大豆は世界第1位の1億5,700万トン、とうもろこしは米国、中国に次ぐ世界第3位の1億2,700万トンです。近年、世界的な飼料用作物の需要が高まりを受けて、大豆・とうもろこしが急速に増産されています（図1）。ブラジルは南半球にあり、北半球大豆・とうもろこしに対して端境期に出荷できるメリットも背景にあります。

大豆の輸出量は9,950万トン、とうもろこしの輸出量は5,400万トンと、いずれも世界第1位です（図3）。日本にとっても、ブラジルは米国に次ぐ大豆・とうもろこしの輸入相手国（数量ベース）となっています（図2）。

また、畜産物生産も盛んです。2023/24年度の牛肉輸出量は290万トン、鶏肉輸出量も477万トンと、いずれも世界第1位となっています。

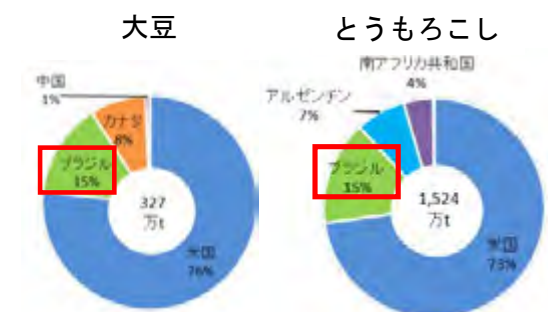
コーヒーと砂糖の生産量も多く、2020/21年度のコーヒー生産量は414万トンと世界第1位。2023/24年度の砂糖も生産量4,100万トン、輸出量3,250万トンと、ともに世界第1位です。

図1 ブラジルのとうもろこし・大豆生産量の推移
(2000/01～2023/24年度)



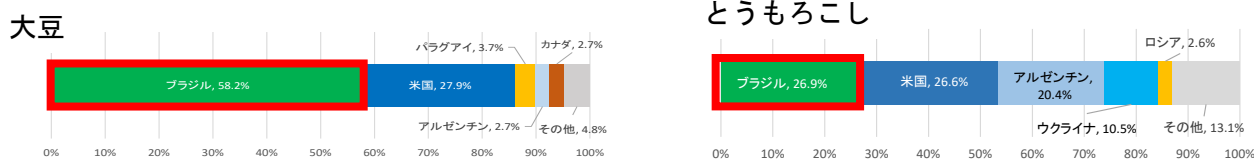
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2024)を基に作成。

図2 日本の輸入量に占める割合(2021)



資料：財務省「貿易統計」(2021年)を基に農林水産省作成。

図3 ブラジルの世界の輸出量に占める割合(2023/24年度)



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2024)を基に作成。

2. 国内の主要生産州

ブラジルの主要な農産物は、大豆、とうもろこし、さとうきび、コーヒー豆の4品目であり、主要生産州は右図のとおりです。

大豆・とうもろこしの主要生産州は、内陸部のマット・グロッソ州、パラナ州、ゴイアス州、マット・グロッソ・ド・スール州です。

コーヒー豆・さとうきびの主要生産州は、海側のミナスジェライス州、サンパウロ州です。

コメの主要生産州は南部のリオ・グランデ・ド・スール州で、主にインディカ米が栽培されています。

ブラジルでは、気候が温暖で降水量が大きいため、大豆・とうもろこしの二毛作が可能です。

とうもろこしは、10月頃に播種し翌年の2～3月頃に収穫する夏とうもろこし、2～3月頃に播種し、6～7月頃に収穫する冬とうもろこしに大別されます。

夏とうもろこしは、とうもろこし全体に占める生産量シェアが2割程度で、畜産が盛んな南部が主産地のため、主に飼料として国内消費されます。

図4 ブラジル農産物の主要生産州



図5 ブラジルのクロープカレンダー（とうもろこし・大豆）

2023/24年度の大豆の作付けは、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年												2024年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等						作付 4.0(百万ha)						収穫 24.4(百万t)						→ 収穫夏冬作計 117.6百万t		
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 21.1百万ha												作付 17.0(百万ha)			収穫 93.2(百万t)					
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等						作付 45.3(百万ha)						↑ 大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け 収穫 155.3(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート（2024.1.10）

一方、冬とうもろこしは、とうもろこし全体に占める生産量シェアが8割程度で、主として輸出向けであり、米国産のとうもろこしと収穫時期がずれており端境期に出荷できるのが強みとなっています。冬とうもろこしは、大豆との二毛作が主流で、9月以降、順次大豆の作付けが行われ、翌年2月以降の大豆収穫後、一部圃場で冬とうもろこしが作付けされます。

とうもろこしの最大生産州はマット・グロッソ州であり、国内生産の約5割を生産します。

大豆の最大生産州も中西部マット・グロッソ州で、1州で4,000万トンを超す生産量を誇っています。もともと農業に不向きと

されたセラード（ブラジル中央部のサバンナ地帯で低木や草原が広がる地域のこと）に含まれる州ですが、近年、複合経営への転換による作付面積の増加、肥料投入量の増加や施肥技術の向上、最新農業機械の導入による単収増を受けて生産量が急増しました。

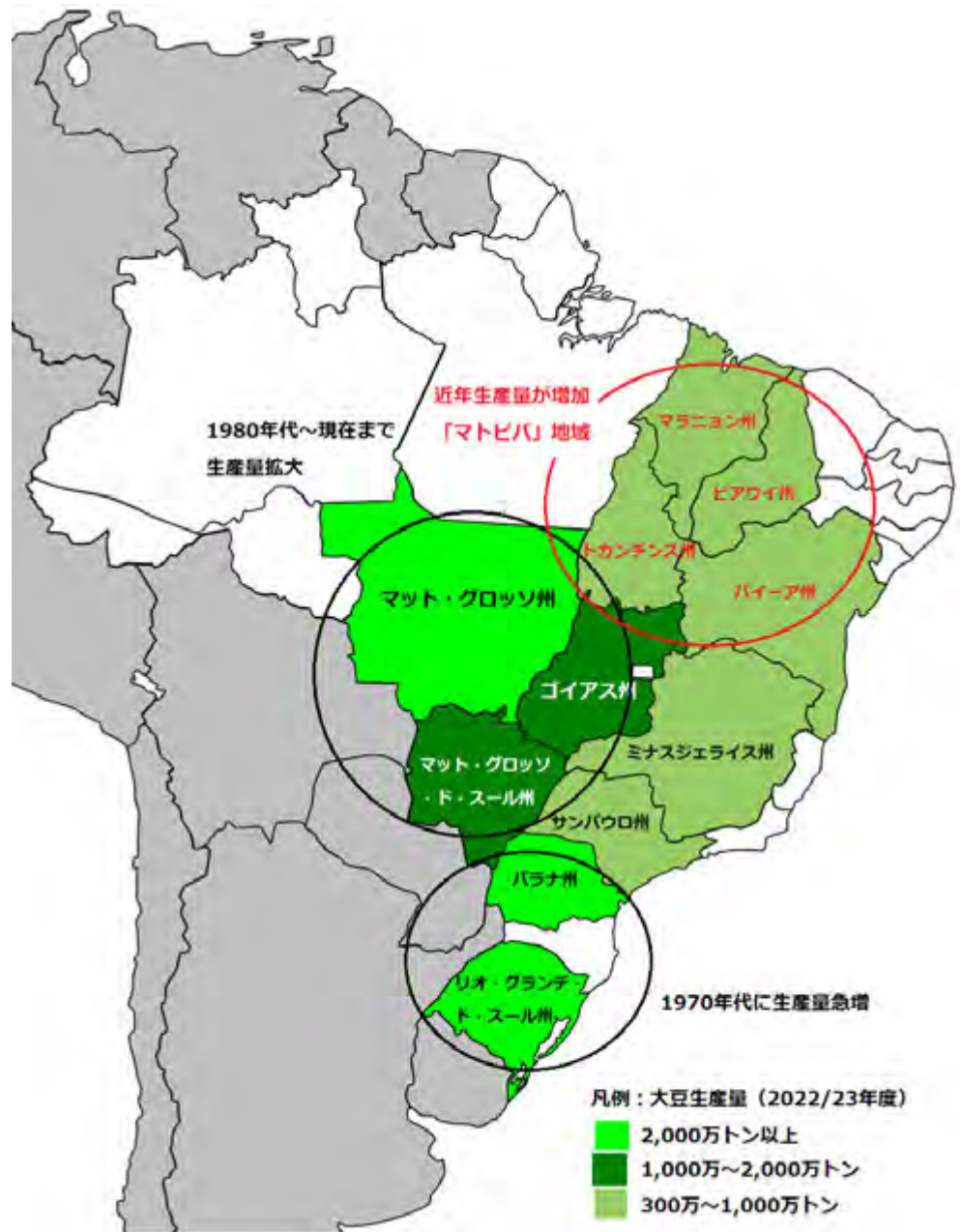
背景には日本によるセラード開発支援もあります。1970年代初めに、当時日本が大豆輸入で依存していた米国が大豆国際相場の高騰を受け、禁輸措置を取ったことをきっかけに、それまでほとんど大豆の生産がなかったブラジルで、日本とブラジルが共同で大豆の開発事業を開始しました。

日系人も多く入植し、強酸性の土壌改良や大豆の品種改良の結果、1975年には南部のリオ・グランデ・ド・スール州やパラナ州を

中心に生産が急増しました。その

後、徐々に内陸部に農地開発が広がり、2023年にはマット・グロッソ州、ゴイアス州等でも生産が拡大しました。近年では、州の頭文字（マラニョン州、トカンチンス州、ピアウイ州、バイーア州）を取って「マトピバ」地域と呼ばれる北部で生産量が伸びています。

図6 大豆の州別生産量（2022/23年度）



資料：CONAB「穀物レポート」（10 January 2024）を基に作成。

3. ブラジルの生産現場

昨年11月、マット・グロッソ州の農村組合及び大豆・とうもろこし農場を訪問しました。

この州の歴史は比較的浅く、農地開拓は、サンパウロ州やミナスジェライス州の人々が移住した40～50年前に始まりました。平坦な土地で日照時間も長く、降水量も多いため、大豆・とうもろこしの二毛作だけでなく、大豆・とうもろこし・牧畜（牧草地）の三毛作も行われていました。

訪問した圃場の規模は1,200ヘクタールであり、この州では中規模とされています（写真4）。

11月上旬は大豆の生育初期であり、圃場では大豆が播種されていました。

圃場には、とうもろこし収穫後の残渣が残されており、カバークロープとして大豆の発芽時に高温障害を防ぐ効果があり、単収向上に貢献しています（写真5）。

訪問した圃場では、GPS搭載の播種機、収穫機による自動化が進んでいました。播種機は一日100haの作付けが可能で、オペレーターに撒いていない列があると伝えたり、撒いたところでは播種を自動的に止めたりします（写真6）。

収穫機は一日8ha程度を収穫可能で同時収穫のために3、4台保有しているとのこと。



写真4 中西部マット・グロッソ州の大豆圃場風景



写真5 とうもろこし残渣によるカバークロープ



写真6 大型播種機

また、広大な農場から数十メートルごとに土壌をサンプリングし、分析して不足した肥料を投入する精密農業が実践されており、訪問した農場では経営者の娘さんが農業技師として、土壌の向上に取り組んでいました。その圃場では酸性土壌を改善するために石灰を投入する必要があるとのことでした。

このように、ブラジルでは、新大陸らしく大規模で自動化された農業が展開されており、二毛作・三毛作を利用した圃場の利用効率の向上、土壌分析による肥料の適切な投入等により生産量を増加させてきました。

次回、ブラジル便り②では、生産した穀物をどのように輸出港まで運ぶのか、という輸送面を中心にお話ししたいと思います。



写真7 圃場の土壌分析について説明する農業技師

文責：辻 貫志（農林水産省大臣官房政策課 食料安全保障室）

本稿は、世界各国・地域の駐在員をはじめ、関係者の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・出典】

- ・ USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 January 2024)
<https://www.usda.gov/oce/commodity/wasde>
- ・ Conab 「Safras Brasileira de GRAOS」 (10 January 2024)
<https://www.conab.gov.br/info-agro/safras/graos>
- ・ Conab 「Safras Brasileira de Café」
<https://www.conab.gov.br/info-agro/safras/cafe>
- ・ Conab 「Safras Brasileira de Cana-de-Açúcar」
<https://www.conab.gov.br/info-agro/safras/cana>
- ・ 和田昌親編著（2011）、「ブラジルの流儀 なぜ「21世紀の主演」なのか」、中公新書
- ・ JTB パブリッシング（2018）、「ひとり歩きの会話集⑨ ブラジル・ポルトガル語」
- ・ 宮路秀作（2022）、「地図でスッと頭に入る 世界の三大穀物」、昭文社

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・EU 等で下方修正されたものの、ロシア、豪州等で上方修正され、前月から上方修正された。

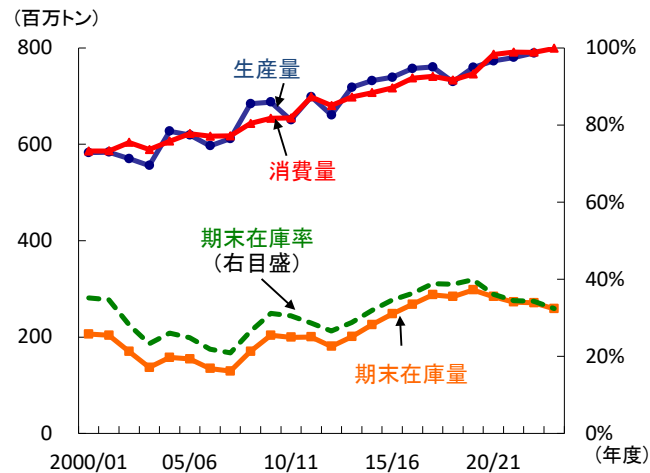
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・ウクライナ等で下方修正されたものの、EU、インドネシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・米国等で下方修正されたものの、ウクライナ、豪州等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



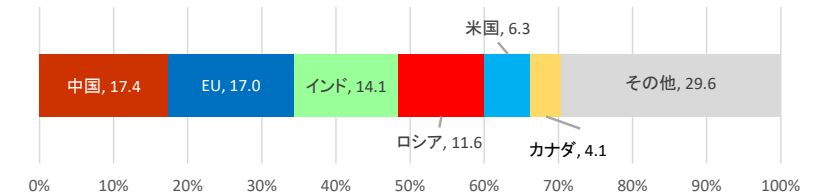
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

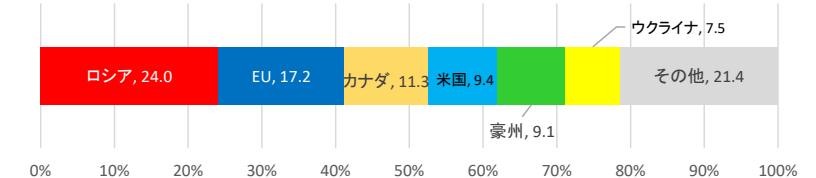
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	780.1	789.2	786.7	1.0	▲ 0.3
消 費 量	791.2	790.8	799.0	1.5	1.0
うち飼料用	160.2	154.0	162.1	1.6	5.3
輸 出 量	202.8	220.2	212.1	1.4	▲ 3.7
輸 入 量	199.9	211.3	211.2	1.3	▲ 0.0
期末在庫量	272.8	271.1	258.8	▲ 0.6	▲ 4.5
期末在庫率	34.5%	34.3%	32.4%	▲ 0.1	▲ 1.9

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (8 March 2024)

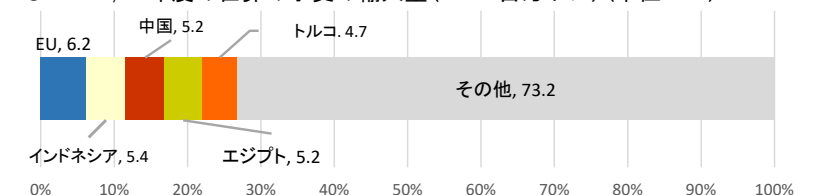
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(786.7百万トン)(単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(212.1百万トン)(単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(211.2百万トン)(単位: %)



（２）国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2024/25 年度の冬小麦は主産地で生育状況が改善

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 49.3 百万トンと、前年度に比べ 9.8%増、過去 5 年平均(48.6 百万トン)に比べ 1.4%増となる見込み。

USDA「Crop Production」(2024.3.8)によれば、冬小麦、春小麦及びデュラム小麦の生産量は、それぞれ 34.0 百万トン(前年度比 13.1%増)、13.7 百万トン(同 4.6%増) 及び 1.6 百万トン(同 7.3%減)の見込み。

USDA によれば、米国の小麦生産量は、2016/17 年度までの 5 年間の平均が 58.7 百万トンだった一方、2017/18 年度以降の平均は 48.5 百万トンに減少した。この要因として収穫面積の減少があり、収穫面積は、2016/17 年度までの 5 年平均は 18.75 百万ヘクタールであった一方、2017/18 年度以降の平均は 15.09 百万ヘクタールに減少した。この収穫面積が減少する理由のひとつは、小麦が、相対的に収益の高いとうもろこしと大豆の輪作に組み込まれたためである。各作物の収益は、2017 年から 2022 年までの間の 1 エーカーあたり小麦は 83.54 ドル増加したのに対し、とうもろこしは 380.69 ドル、大豆は 144.89 ドル増加した。また、とうもろこしや大豆種子の開発や栽培技術の向上等により、乾燥した小麦生産地においても栽培が可能となったため輪作が可能となった。

2024/25 年度の冬小麦の播種面積は、USDA「Winter Wheat and Canola Seedings」(2024.1.12)によれば、播種面積は 13.93 百万ヘクタールと、市場価格の低下を受け 2023/24 年度に比べ 6.2%減少した。

冬小麦の生育状況は 2023 年の秋から改善し、作柄評価を表す「やや良～良」の割合は、主産地であるカンザス州では、2023 年 11 月 26 日の 32 %から 2024 年 2 月 25 日には 57%に増加した。同じく、ネブラスカ州やオクラホマ州でも「やや良～良」の割合は、それぞれ 49%から 60%、53%から 70%に増加した。

生育段階は、2 月の中西部やプレーンズ平原での平年を上回る記録的な暖かさを受け、2 月下旬に冬小麦は再生長を開始した。なお、再生長の時期が早かったため、急激な寒波の影響を受ける可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測から 0.4 百万トン下方修正され 19.3 百万トンと、前年度に比べ 6.4%減少し、1972/73 年度以降で最低の見込み。また、2023/24 年度のうち 2023 年 6 月～2024 年 1 月の輸出量は、ロシアからの予想を上回る小麦供給量や、国際市場で価格競争力が乏しいことから 11.7 百万トンと、前年度同期(14.3 百万トン)を 18.2%下回っている。

2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、18.3 百万トンの見込み。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.8	44.9	49.3	-	9.8
消 費 量	30.4	30.4	31.1	-	2.4
うち飼料用	2.4	2.1	3.3	-	56.5
輸 出 量	21.7	20.7	19.3	▲ 0.4	▲ 6.4
輸 入 量	2.6	3.3	4.0	-	19.0
期末在庫量	18.4	15.5	18.3	0.4	18.1
期末在庫率	35.3%	30.4%	36.3%	1.1	5.9

(参考)
収穫面積(百万ha) 15.03 14.36 15.08 - 5.0
単収(t/ha) 2.98 3.13 3.27 - 4.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(8 March 2024)

図 米国産小麦の生産量、収穫面積、単収の推移

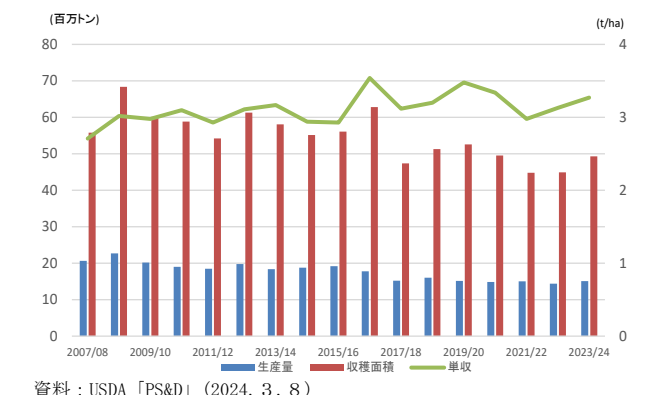


図 米国産小麦の輸出量の推移



＜ カナダ ＞ 2024/25 年度の生産量は 34.6 百万トン(前年度比 8.3%増) (AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2024.3.19)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく 32.0 百万トンと、前年度に比べ 6.9%減少するものの、過去 5 年平均に比べ 1.4%増加の見込み。種類別の生産量は、普通小麦は収穫面積が増加したものの、干ばつによる単収の低下を受け 27.9 百万トンと前年度比 2.2%減少も、5 年平均比では 6.3%増加。デュラム小麦は、平原西部の干ばつによる収穫面積の減少と単収の低下を受け 4.0 百万トンと前年度比 30.1%減、5 年平均比 23.1%減の見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, 2024」(2024.3.11)によれば、2024/25 年度の作付意向面積は、春小麦は 7.78 百万ヘクタール(前年度比 1.2%減)、デュラム小麦は 2.57 百万ヘクタール(同 5.1%増)の見込み。すでに作付けられている冬小麦の面積(0.59 百万ヘクタール)を加えた小麦全体の作付面積は、10.95 百万ヘクタール(前年度比 0.1%増)となる見込み。州別には、前年度に比べ、サスカチュワン州で 0.1%増加、アルバータ州で 2.2%増加の一方、マニトバ州で 0.6%減少する見込み。

AAFC によれば、2024/25 年度の小麦全体の生産量は、作付意向面積調査結果を受け作付面積が増加し、前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、前年度比 8.3%増の 34.6 百万トンの見込み。なお、単収は干ばつから回復し例年並みの単収になると仮定している。種類別の生産量は、普通小麦は作付面積の増加を受け前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、前年度比 3.7%増の 28.9 百万トン。デュラム小麦は作付面積の増加を受け前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度比 39.8%増の 5.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 23.5 百万トンと、生産量の減少を受け前年度比 8.6%減少の見込み。種類別の輸出量は、普通小麦は前月予測からの変更はなく 20.3 百万トンと、前年度に比べ 1.8%減少。デュラム小麦は前月予測からの変更はなく 3.2 百万トンと、生産量減少による輸出余力低下と豊作となったトルコとの競合の強まり等を受け前年度に比べ 36.7%の減少。なお、2023 年 8 月から本年 3 月上旬までの輸出量は、普通小麦が前年度同期比 8 %増加した一方、デュラム小麦は同 41%減少した。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2024 年 1 月の輸出量は、普通小麦が 154.9 万トンで、輸出先国は中国(21.5%)、ナイジェリア(9.4%)、インドネシア(9.1%)の順。デュラム小麦は 34.9 万トンで、アルジェリア(27.1%)、モロッコ(23.1%)、イタリア(20.1%)の順。

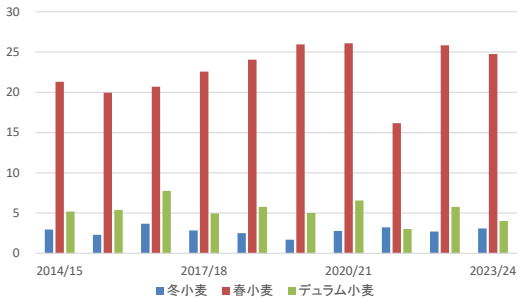
小麦－カナダ (春小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)			
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	22.4	34.3	32.0 (32.0)	-	▲ 7.0	
消 費 量	10.2	9.5	8.7 (8.6)	-	▲ 7.9	
うち飼料用	5.2	4.3	3.5 (4.1)	-	▲ 18.8	
輸 出 量	15.1	25.6	24.0 (23.5)	-	▲ 6.2	
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1	
期末在庫量	3.7	3.5	3.4 (3.6)	▲ 0.1	▲ 4.0	
期末在庫率	14.5%	10.0%	10.3% (11.1%)	▲ 0.4	0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.68 (10.68)	-	6.0	
単収(t/ha)	2.44	3.41	2.99 (2.99)	-	▲ 12.3	

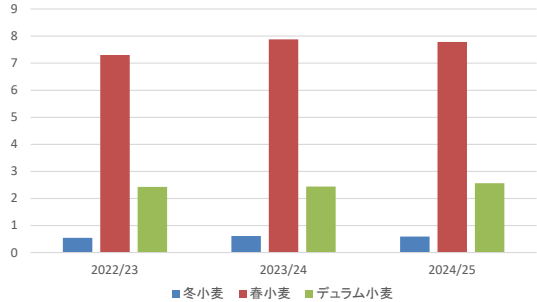
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(19 March 2024)

図 カナダ産小麦の生産量の推移(冬・春・デュラム小麦)
(百万トン)



資料 AAFC 「Outlook for Principal field crops」(2024. 3. 19) のデータを基に農林水産省で作成

図 カナダ産小麦の作付面積の推移
(百万ヘクタール)



資料 カナダ統計局「Principal field crop areas, 2024」(2024. 3. 11) のデータを基に農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の生産量及び輸出量は 0.5 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、単収の引上げから前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 26.0 百万トンの見込み。史上最高の前年度に比べ、単収の低下と収穫面積の減少から 35.9%減少するものの、10 年平均(26.5 百万トン)に比べ 1.8%の減少とほぼ平年並みの見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2024.3.5)によれば、2023/24 年度の実生産量は、ニューサウスウェールズ(NSW)州等での生産量の引上げを受け前回の 12 月予測から 0.5 百万トン上方修正され 26.0 百万トンと、史上最高の前年度(40.5 百万トン)から 36.0%減少するものの、過去 10 年平均比(26.5 百万トン)2.0%の減少に留まる見込み。

2023/24 年度の生育状況は、主要産地である NSW 州の南部及びサウスオーストラリア(SA)州等で生育にとって重要な時期に降雨に恵まれたものの、ウェスタンオーストラリア(WA)州及び NSW 州北部では乾燥天候が続き単収が低下した。なお、収穫は、WA 州等では生育シーズン終盤の高温・乾燥天候の影響を受け例年よりも早く終了。また、SA 州の一部等では、11 月の降雨を受け収穫は遅れた。

品質は、WA 州及び SA 州ではラニーニャが生じた過去 3 年間に比べ高タンパク質含有小麦の比率が高くなった一方、NSW 州等では収穫期の降雨を受け品質が低下した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、生産量の上方修正を受けた輸出余力の増加から、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 20.0 百万トンの見込み。過去最高の前年度に比べ、乾燥天候による生産量の減少から 37.1%減少するものの、10 年平均(18.9 百万トン)比 5.8%増加。

ABARES によれば、特に輸出量が多い WA 州と SA 州での生産量の減少を受け、2023/2024 年度は 21.8 百万トンと前年度に比べ 32.4%減少するものの 10 年平均(18.6 百万トン)を 17.2%上回る見込み。

前年度の史上最高の輸出量から減少したものの、2022/23 年度の記録的な生産量で輸出余力があるため、今後も輸出量は 2022/23 年までの 10 年間平均を上回る水準が続くと予想されており、2024/25 年度の輸出量は 20.0 百万トンとなる見込み。なお、輸出先については、人口と所得の増加に伴い食料需要が増加しているアジア市場が豪州産小麦の最大の輸出市場であり続ける可能性が高い。

現地情報会社によれば、2023/24 年度(2023 年 10 月～2024 年 9 月)の 1 月輸出量は 272.1 万トンと前年度に比べ 16.3%減少。輸出先国は、中国(36.1%)、インドネシア(20.1%)、フィリピン(8.4%)の順で、アジア市場向けが多い。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10年～24年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	36.2	40.6	26.0 (25.5)	0.5	▲ 35.9
消 費 量	8.5	8.0	7.0 (7.2)	-	▲ 12.5
うち飼料用	5.0	4.5	3.5 (3.5)	-	▲ 22.2
輸 出 量	27.5	31.8	20.0 (19.1)	0.5	▲ 37.1
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-
期末在庫量	3.5	4.4	3.6 (2.9)	-	▲ 18.3
期末在庫率	9.6%	11.0%	13.2% (11.0%)	▲ 0.2	2.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.50 (12.50)	-	▲ 4.2
単収(t/ha)	2.85	3.11	2.08 (2.04)	0.04	▲ 33.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)

図 豪州の州別小麦生産量の推移

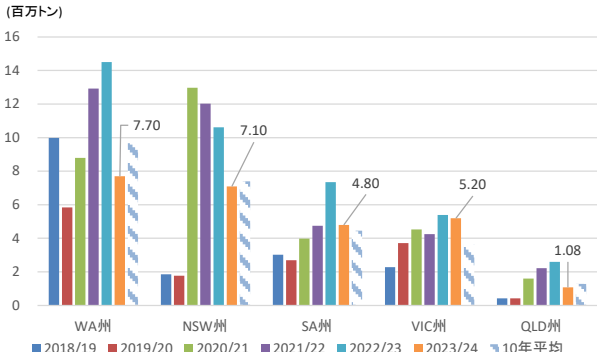


表 豪州産小麦の輸出量の推移

(輸出量：万トン、シェア：%)

2024年1月			2023年10月～2024年1月			2022年10月～2023年1月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	98.2	36.1	中国	169.0	25.4	中国	260.1	26.8
インドネシア	54.8	20.1	インドネシア	108.3	16.3	インドネシア	171.7	17.7
フィリピン	22.8	8.4	フィリピン	70.4	10.6	フィリピン	108.3	11.2
日本	21.3	7.8	ベトナム	50.5	7.6	韓国	95.6	9.9
韓国	11.4	4.2	日本	49.9	7.5	ベトナム	59.0	6.1
タイ	10.9	4.0	イエメン	41.3	6.2	日本	41.5	4.3
その他	52.7	19.4	その他	175.0	26.3	その他	234.2	24.1
計	272.1	100.0	計	664.4	100.0	計	970.4	100.0

資料：豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2023/24 年度の輸入量は史上第 1 位の 13.0 百万トン

【生育・生産状況】欧州委員会(2024.2.29)によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測から 0.2 百万トン下方修正され 133.7 百万トンと、前年度比で 0.5%減少も、過去 5 年平均比で 0.8%増加する見込み。

小麦全体のうち普通小麦は、前月予測に比べ 0.3 百万トン下方修正され 126.6 百万トンと、前年度比で 0.2%減少し、5 年平均比で 1.5%増加。また、デュラム小麦は、0.1 百万トン上方修正され 7.1 百万トンと、前年度比で 6.3%減少し、5 年平均比でも 10.2%減少する見込み。

欧州委員会によれば、2024/25 年度の冬小麦は、2 月～3 月上旬にかけて欧州の大半で温暖な天候が続いたため、欧州南部の大部分やフランス北東部、ドイツ、ルーマニア北東部の一部で再生長が開始された。生育は平年と比較して最大 4 週間早い。なお、再生長を開始した冬小麦は耐寒性を失うため、今後の寒波の影響が懸念されるものの、中長期的予報によれば温暖な天候が続く見込みから、その可能性は低いとみられる。また、欧州北西部等では降雨量が過剰であり生産量への影響が懸念されている。

フランスでは、2 月下旬から 3 月初旬にかけての降雨で土壌水分量は飽和状態となり、南西部では洪水の発生や、過剰な土壌水分量で施肥等の農作業が妨げられた。フランスアグリメールによれば、3 月 4 日時点の生育状況を示す「良～優良」の割合は、普通小麦は 68%、デュラム小麦は 73%と、それぞれ前年度の 95%、91%を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 13.0 百万トンと、前年度及び過去 5 年平均をそれぞれ 7.4%、94.4%上回り史上 1 位となる見込み。

2023/24 年度のうち 7 月から 12 月までの輸入量は、普通小麦が 480.1 万トン、デュラム小麦が 157.6 万トン。輸入先国は、普通小麦はウクライナ(62.6%)、カナダ (9.9%)、デュラム小麦はトルコ (36.0%)、ロシア(25.8%)の順で、安価なウクライナ産小麦の需要が持続している。輸入量増加の背景には、輸入量が減少しているとうもろこしの代替として相対的に安価な小麦の飼料需要が増加していることがある。

輸出量は前月予測からの変更はなく 36.5 百万トン(前年度比 4.0%増、5 年平均比 13.2%増)の見込み。

欧州委員会によれば、12 月の輸出量は普通小麦が 321.5 万トン(5 年平均比 13.0%増)、デュラム小麦は 8.4 万トン(同 2.4%増)。輸出先国は、普通小麦が中国(21.5%)、アルジェリア(14.4%)、モロッコ(8.5%)の順でアフリカ諸国向けが多いが、10 月、11 月はエジプト向けが、12 月は中国向けが約 20%を占めた。デュラム小麦はチュニジア(57.9%)、トルコ(6.7%)、モロッコ(6.5%)の順でアフリカ、中東向けが多い。

小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	138.2	134.2	133.7 (133.1)	▲ 0.4	▲ 0.4	
消費量	108.3	108.0	111.5 (109.9)	1.0	3.2	
うち飼料用	45.0	44.0	47.0 (45.7)	1.0	6.8	
輸 出 量	31.9	35.1	36.5 (34.3)	-	4.0	
輸 入 量	4.6	12.1	13.0 (10.4)	1.0	7.4	
期末在庫量	13.3	16.5	15.2 (17.8)	▲ 0.4	▲ 8.2	
期末在庫率	9.5%	11.5%	10.3% (12.4%)	▲ 0.3	▲ 1.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.29	24.38	24.22 (23.88)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	5.69	5.50	5.52 (5.57)	▲ 0.01	0.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)

図 EU の小麦輸入量の推移

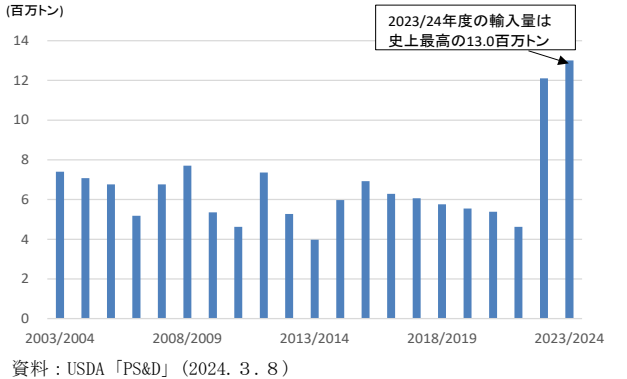


表 EU の小麦輸入量と輸入元国(2023 年 7 月～12 月)

普通小麦			デュラム小麦		
国名	輸入量(万トン)	シェア(%)	国名	輸入量(万トン)	シェア(%)
ウクライナ	300.7	62.6%	トルコ	56.7	36.0%
カナダ	47.7	9.9%	ロシア	40.6	25.8%
モルドバ	36.2	7.5%	カナダ	28.7	18.2%
ロシア	28.0	5.8%	カザフスタン	19.3	12.2%
英国	26.8	5.6%	米国	9.8	6.2%
その他	40.8	8.5%	その他	2.6	1.6%
計	480.1	100.0%	計	157.6	100.0%

資料：EU 委員会「EU Crops Market Observatory」(2024. 2. 16)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の輸入量は輸入ペースの低下を受け下方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、136.6 百万トンの見込み。収穫面積は増加したものの単収の低下から、史上最高の前年度(137.7 百万トン)に比べ、生産量は 0.8%減少した。なお、過去 5 年平均の 134.8 百万トンを 1.3%上回る。2023/24 年度は、収穫前に豪雨に見舞われ、生産量が減少するとともに生産量に占める飼料用グレード小麦の割合が増加した。

中国国家気象センター「中国気象農業報道」(2023.3.5)によれば、2024/25 年度の大部分の冬小麦は、播種以来、平年に比べ気温が高かったことから生長が早まっている。また、初期生育期、休眠期及び再生長期を通じて、適切な日照及び土壌水分状態に恵まれている。なお、2 月下旬、江蘇省等の江淮地区等で、降雨及び降雪により一部で凍害が生じたものの、影響は比較的軽微であった。

2 月下旬から 3 月初めの生育段階は、河北省、安徽省、江蘇省等では越冬期、河南省、山東省等では再生長期、湖北省では節間伸長期に入っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量のうち飼料用消費量は、2023 年 5 月の降雨被害による品質低下に伴う飼料用グレード小麦の増加を受け飼料用需要が増加し 37.0 百万トンと、前年度に比べ 12.1%増加する見込み。

2023/24 年度(2023 年 7 月～2024 年 6 月)の輸入量は、輸入ペースが低下していることを受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正され 11.0 百万トンと、前年度に比べ 17.2%減少の見込み。なお、2023 年 10 月から 12 月にかけて、中国は米国産ソフトレッドウインター(SRW)の輸入契約を増加させたものの、最近その一部をキャンセルしている。

中国農業農村部「中国農産品供需形勢分析月報」によれば、2023 年の小麦及び小麦製品の輸入量は、国際小麦価格の低下と高品質小麦の国内需給の逼迫の影響を受け、大幅に増加した。なお、中国は、豪雨による生産量の低下と品質の低下を受け、食用の小麦を輸入しているとみられる。

中国税関統計によれば、2023 年 1 月から 12 月までの輸入量合計は 1,210.4 万トンで、前年に比べ 13.7%増加。同期間の輸入先国のシェアは、豪州 59.5%(前年同期 60.2%)、カナダ 19.6%(同 16.8%)、フランス 6.8%(同 16.0%)、米国 6.7%(同 5.9%)の順で、豪州とカナダの 2 か国で輸出シェアの 79%を占めている。前年に比べると、カナダ及び米国、カザフスタンからの輸入シェアが増加した一方、フランスのシェアが低下したが、依然として豪州の輸入シェアは約 60%と高い。

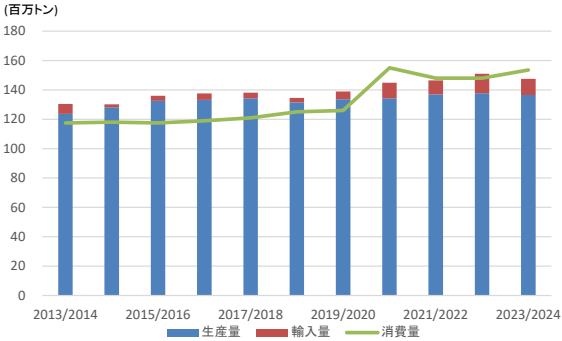
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.0	137.7	136.6 (136.6)	-	▲ 0.8
消 費 量	148.0	148.0	153.5 (149.5)	-	3.7
うち飼料用	35.0	33.0	37.0 (32.0)	-	12.1
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.2)	-	▲ 5.3
輸 入 量	9.6	13.3	11.0 (12.7)	▲ 1.0	▲ 17.2
期末在庫量	136.8	138.8	132.0 (139.0)	▲ 1.0	▲ 4.9
期末在庫率	91.9%	93.2%	85.5% (92.3%)	▲ 0.6	▲ 7.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.63 (23.63)	-	0.5
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.78)	-	▲ 1.4

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)

図 中国の小麦生産量、消費量、輸入量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2024. 3. 8)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量及び輸入先国

(輸出量: 万トン、シェア: %)

2023年12月			2023年1月～2023年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
カナダ	34.9	57.6	豪州	720.3	59.5
豪州	15.2	25.1	カナダ	237.5	19.6
ロシア	3.9	6.4	フランス	82.4	6.8
米国	3.1	5.1	米国	81.4	6.7
カザフスタン	2.9	4.8	カザフスタン	54.1	4.5
その他	0.6	1.0	その他	34.7	2.9
計	60.6	100.0	計	1,210.4	100.0

資料: 中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2023/24 年度の輸出量は史上最高の 51.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、91.5 百万トンの見込み。史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ 0.5%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 15.0%上回り史上 2 位となる見込み。

種類別の生産量は、冬小麦は前月予測からの変更はなく 64.0 百万トン、春小麦は収穫面積の増加と単収の上昇から前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 27.5 百万トン(同 14.6%増)の見込み。春小麦の単収は、生育期の乾燥天候の影響や収穫期の降雨の影響を受けずに史上最高となった。

ロシア連邦統計庁等によれば、2023/24 年度の冬小麦の播種面積は前年度同期(16.72 百万ヘクタール)を下回る 15.69 百万ヘクタール。

ロシア気象センターによれば、2024/25 年度の冬穀物の生育状況は、ロシアヨーロッパ部北部では気象条件は平年並みであったものの、一部圃場で氷層が形成されており不良。ヨーロッパ部南部では気温の上昇とともに再生長が始まった。アジア部では、一部地域でスノーカバー(作物が積雪により外気の寒さから守られる)が不十分であったため作物への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、輸出価格は関税低下等を受け 199 ドル/トンと、2020 年以降最低となり、主要輸出国(EU、カナダ、米国、豪州、アルゼンチン)中で最も競争力がある。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 51.0 百万トン。輸出余力が潤沢で好調な輸出ペースを受け史上最高であった前年度(47.5 百万トン)を更に 7.4%上回る見込み。

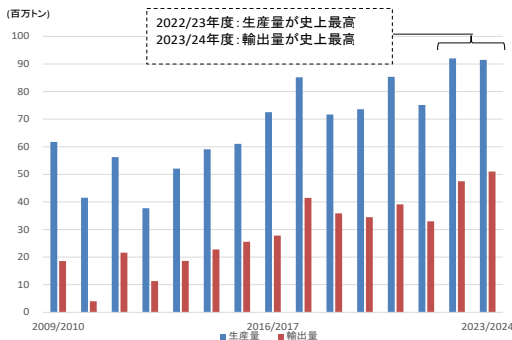
現地情報会社等によれば、2023/24 年度のうち 2023 年 7 月～本年 2 月のロシアの輸出量は 3,501.4 万トンと、過去最高であった 2022/23 年度の同期間(3,118.1 万トン)を 12.3%上回った。また、2 月の輸出量は 397.1 万トンと、過去 3 年平均(325.9 万トン)を 21.8%上回った。2 月の輸出先国は、エジプト(23.5%)、トルコ(10.3%)、パキスタン(8.0%)の順。なお、デュラム小麦は欧州への輸出量増加で国内価格が上昇したため、2023 年 12 月～本年 5 月まで禁輸措置を導入。現地情報会社のデータにより、2021/22 年度(ウクライナ侵攻前)及び 2023/24 年度(ウクライナ侵攻後)の 7 月～2 月でロシアの輸出先シェアを比較すると、2021/22 年度は中東(41.6%)、サブサハラ(17.5%)、北アフリカ(17.4%)の順、2023/24 年度は中東(26.4%)、北アフリカ(23.3%)、サブサハラ(14.4%)の順となり、中東が低下し、北アフリカが伸びている。また、輸出量の差では、南アジアで 403.0 万トン増、北アフリカで 366.9 万トン増の一方、中東で 148.3 万トン減少している。

小麦ーロシア (主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	75.2	92.0	91.5 (91.0)	0.5	▲ 0.5	
消費量	41.8	42.3	43.0 (43.6)	-	1.8	
うち飼料用	18.5	19.0	20.0 (19.0)	-	5.3	
輸出量	33.0	47.5	51.0 (50.4)	-	7.4	
輸入量	0.3	0.3	0.3 (0.1)	-	-	
期末在庫量	12.1	14.6	12.4 (12.1)	0.5	▲ 15.0	
期末在庫率	16.2%	16.3%	13.2% (12.9%)	0.5	▲ 3.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	28.83 (29.00)	0.03	▲ 0.6	
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.17 (3.14)	0.01	-	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)

図 ロシアの小麦生産量と輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2024. 3. 8)

表 ロシア産小麦の輸出量と輸出先国 (輸出量：万トン、シェア：%)

2021/22(ウクライナ侵攻前)			2023/24(ウクライナ侵攻後)		
地域名	輸出量	シェア	地域名	輸出量	シェア
中東	1,076.3	41.6	中東	928.0	26.4
サブサハラ	453.8	17.5	北アフリカ	817.9	23.3
北アフリカ	451.0	17.4	サブサハラ	506.3	14.4
旧ソ連	381.0	14.7	南アジア	465.4	13.2
欧州	112.0	4.3	旧ソ連	296.6	8.4
南アジア	62.4	2.4	東南アジア	162.5	4.6
南米	12.6	0.5	欧州	133.7	3.8
その他	38.7	1.5	その他	207.1	5.9
計	2,587.8	100.0	計	3,517.5	100.0

2023・24年度の地域内主出先国シェア
中東地域 トルコ(51.9%)、イエメン(13.1%)、サウジアラビア(11.6%)
北アフリカ地域 エジプト(58.8%)、アルジェリア(20.7%)、リビア(10.3%)
サブサハラ 南アフリカ(0.6%)、タンザニア(0.5%)、スーダン(0.4%)

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の輸出量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく23.4百万トンの見込み。前年度に比べ、収穫面積は減少も、良好な天候による単収の上昇を受け、前年度(21.5百万トン)を8.8%上回るものの、5年平均(26.8百万トン)に比べ12.8%下回る。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25年度の冬小麦の播種面積は4.16百万ヘクタールと、前年度同期(3.64百万ヘクタール)を14.3%上回った(2023年11月27日現在)。なお、ロシアのウクライナ侵攻前の2021年の播種面積(6.25百万ヘクタール)に比べると33.4%の減少となる。

2024年2月は、国内全体で非常に温暖な天候となった。また、降水量は南部で平年比を下回ったものの、大部分の地域で平年を上回った。この温暖な天候と適度な降水量を受け、2月下旬に南部及び西部、中央部の一部で2024/25年度の冬作物が徐々に再生長を開始した。生育段階は、大部分の圃場で分けつ期、一部で3葉形成期を迎えている。一方、北部から中央部の圃場では引き続き越冬期となっている。

また、同省等によれば、2024/25年度の春小麦の播種が開始されており、播種面積は3月7日現在で、4.3千ヘクタールと前年度同時期の6.7千ヘクタールを下回っている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、主にEU及びアジア向けの輸出が堅調なことから、前月予測から1.0百万トン上方修正され16.0百万トンとなるものの、前年度に比べ6.5%減少、5年平均(18.0百万トン)に比べ11.0%減少の見込み。黒海のオデーサ港等の主要輸出港からのアフリカ及びアジア向け輸出が黒海穀物イニシアティブの履行停止の影響を受け輸出量は前年度に比べ減少するものの、2023年8月の臨時回廊の設置で輸出量は増加している。

ウクライナ政府等によれば、2023/24年度のうち2023年7月から2024年2月までの輸出量は1,177.2万トン(ロシアのウクライナ侵攻前の2020/21年度同時期の14.1%減)。この間、黒海穀物イニシアティブの履行されていた7月の輸出量は82.4万トンに減少したものの、臨時回廊の設置を受け、輸出量は増加傾向となり2024年2月の輸出量は255.5万トンとなった。同期間の輸出先国は、スペイン(33.4%)、ルーマニア(8.5%)、エジプト(8.5%)の順。スペイン向けシェアが高い要因は、同国の乾燥天候による生産量の減少と飼料用小麦の需要増加、ウクライナ産小麦の飼料用グレードの増加等による。

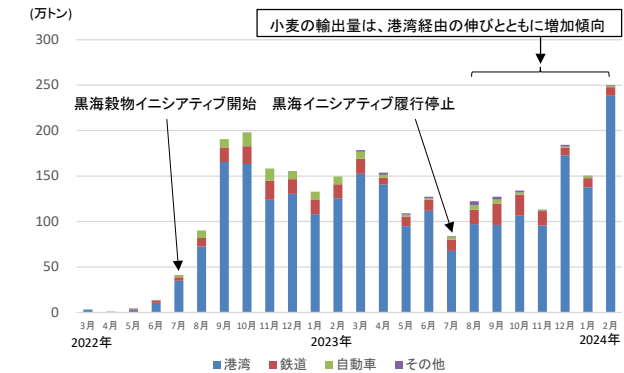
また、輸送手段別の小麦輸出量は、船舶95.4%、鉄道3.8%、自動車0.6%と船舶輸送のシェアが増加している。小麦の安定的な供給の維持には臨時回廊が支障なく機能し続けることが条件となっている。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）
(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	33.0	21.5	23.4	(28.7)	-	8.8
消 費 量	9.0	7.7	7.7	(13.9)	▲ 0.3	-
うち飼料用	3.0	2.7	2.7	(3.0)	▲ 0.3	-
輸 出 量	18.8	17.1	16.0	(15.5)	1.0	▲ 6.5
輸 入 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	33.3
期末在庫量	6.8	3.5	3.3	(2.3)	▲ 0.7	▲ 6.3
期末在庫率	24.3%	14.1%	13.8%	(7.7%)	▲ 3.5	▲ 0.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	5.05	(6.32)	-	▲ 9.8
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.63	(4.54)	-	20.6

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)

図 ウクライナ産小麦の輸送手段別輸出量の推移



資料:ウクライナ農業政策食料省及びインフラ省、現地情報会社のデータ
をもとに、農林水産省で作成

写真 2024/25 年度の冬小麦の圃場(2024. 3. 1)



冬小麦は順調に越冬し、「分けつ期」を迎えている。生育状況はおおよそ「良好」か「並」の状態だが、今後、夜間の厳しい寒さに見舞われる可能性がある。
今年度は冬小麦に可能な限り資金を投入したが、価格が大幅に下落。農業生産者の多くは2年続けて小麦の播種を諦め、より収益性の高い作物に切替えている。

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン等で上方修正されたものの、南アフリカ、ウクライナ、メキシコ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

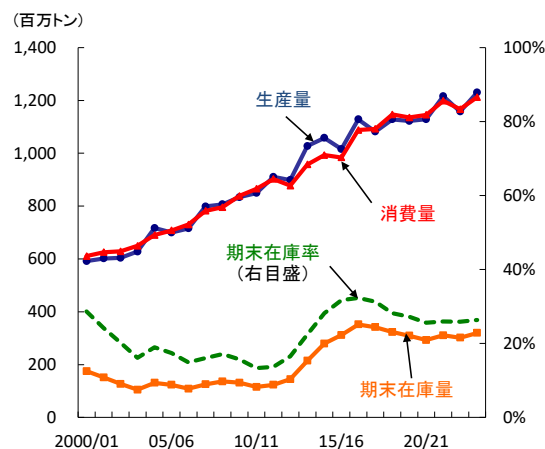
消費量 前年度比  前月比 

・EU、南アフリカ等で下方修正されたものの、ブラジル、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・南アフリカ等で下方修正されたものの、ウクライナ、アルゼンチンで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2024.3.8）をもとに農林水産省にて作成

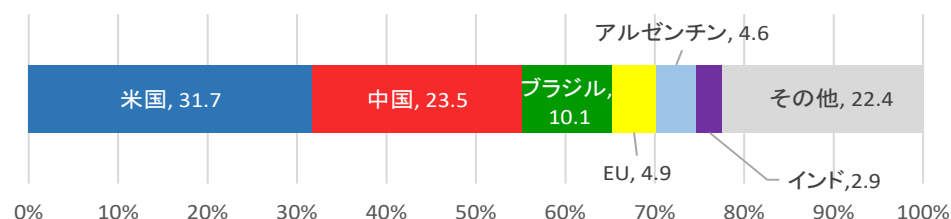
◎世界のとうもろこし需給

（単位：百万トン）

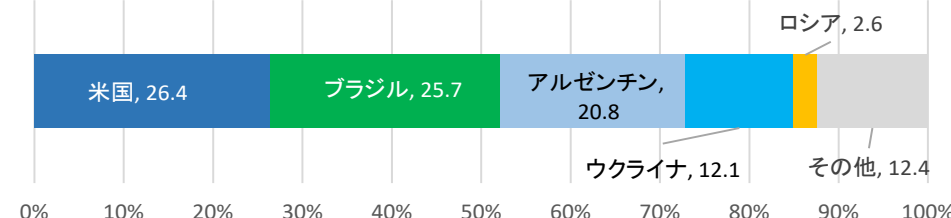
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	1,216.0	1,157.5	1,230.2	▲ 2.3	6.3
消費量	1,198.3	1,166.6	1,212.2	1.5	3.9
うち飼料用	743.3	729.6	761.6	▲ 0.1	4.4
輸出量	206.4	180.2	202.3	1.5	12.3
輸入量	184.5	172.6	189.5	▲ 0.3	9.8
期末在庫量	310.7	301.6	319.6	▲ 2.4	6.0
期末在庫率	25.9%	25.9%	26.4%	▲ 0.2	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 March 2024)

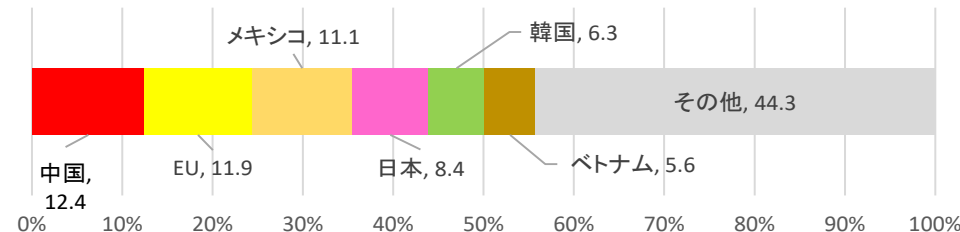
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,230.2 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(202.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(189.5 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 収穫面積の増加等により、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の増加（対前年度比9.9%増）や単収の増加（同2.2%増で史上最高）を受け、前年度より12.4%増の389.7百万トンと史上最高の見通し。収穫面積の増加については、肥料価格の高騰が前年度から落ち着いたことを受けて、とうもろこしを選択した農家が増加したことも要因とみられる。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ3.4%増の316.4百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格の低下に伴う需要増加を受けた輸出の回復期待から、前年度より26.4%増の53.3百万トンの見込み。他方で、2023/24年度に輸入が増加すると見込まれる中国への輸出をめぐり、前年度が史上最高の生産見通しとなったブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2024.3.8）によれば、本年3月の米国産の輸出価格は、増産による国内供給の増加と、南米産やウクライナ産の供給増の影響を受けた米国産需要の低下を受け、3月6日現在、前月から10ドル/トン低下し188ドル/トン。なお、2023年9月～2024年2月の輸出量は2,309万トンと、前年同時期の1,479万トンより56.1%増加。輸出先国の内訳は、中国（824.7万トン）、メキシコ（710.6万トン）、コロンビア（198.6万トン）の順となっている。干ばつによる減産に加え飼料需要が増加したメキシコ向けの輸出量が増加している。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、増産を受けて前年度より59.7%増の55.2百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より5.0ポイント上昇し14.9%と、過去3年平均（9.2%）を上回っている。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

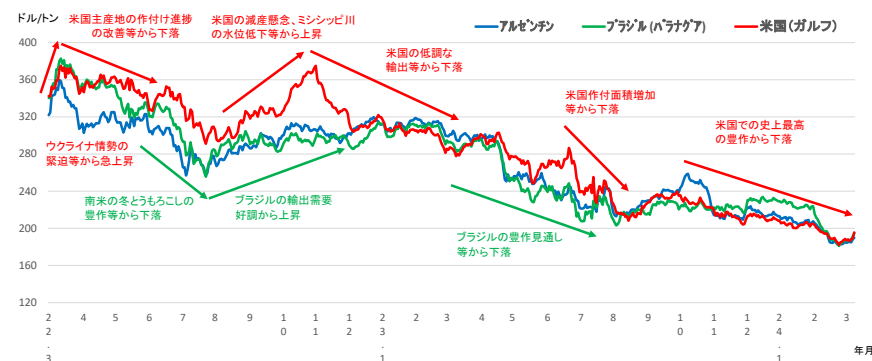
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年9月～24年8月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	381.5	346.7	389.7	－	12.4
消 費 量	315.7	306.0	316.4	－	3.4
うち飼料用	144.0	139.4	144.2	－	3.4
エタノール用等	135.1	131.5	136.5	－	3.8
輸 出 量	62.8	42.2	53.3	－	26.4
輸 入 量	0.6	1.0	0.6	－	▲ 34.7
期末在庫量	35.0	34.6	55.2	－	59.7
期末在庫率	9.2%	9.9%	14.9%	－	5.0

（参考）

収穫面積(百万ha)	34.39	31.85	35.01	－	9.9
単収(t/ha)	11.09	10.89	11.13	－	2.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（8 March 2024）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成。

< ブラジル > 2023/24 年度の生産量は高温乾燥により減少

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、史上最大の豊作となった前年度より 9.5%減の 124.0 百万トンの見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2024.3.12）によれば、2023/24 年度のとうもろこしの生産量は、前年度比 14.5%減の 112.8 百万トンの見込み（P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。夏とうもろこしは、エルニーニョ現象による南部での播種期の降雨過多、生殖成長期の乾燥の影響等により、生産量が引き下げられた。冬とうもろこしも、中西部での高温乾燥の影響を受け、前月から下方修正された。

USDA によれば、夏とうもろこしが主に栽培されている南部では、3 月上旬、生育に適した降雨と夏の温暖な気候からとうもろこしの成熟が急速に進んだ。南部のリオ・グランデ・ド・スール州における夏とうもろこしの収穫進捗率は 3 月 7 日時点で 70%と、前年同時期（61%）より進んでいる。

一方、冬とうもろこしが主に栽培される中西部のマット・グロッソ州において、大豆の収穫が順調に進展し、その後作付けされる冬とうもろこしの作付け進捗率は 3 月 8 日時点で 98%と、前年同時期（96%）を上回っている。3 月上旬現在、生育に適した降雨量と良好な日照条件から定着状況は良好。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、豊作の 2022/23 年産が国内消費に向けられる見通しを受けて、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、飼料用及び加工用ともに需要増加等から、前年度より 2.6%増の 78.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度より 4.2%減の 52.0 百万トンとなり、米国に次ぐ世界第 2 位の輸出国に後退する見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 1～2 月の輸出量は 6.6 百万トンで、前年度同時期比 22%減。内訳は、中国（1.4 百万トン）、エジプト（0.7 百万トン）、イラン（0.6 百万トン）の順。2022 年 11 月末以降に開始された中国向けとうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡した 2023 年 7 月以降本格化しており、一部の港で滞船が見られたものの概ね順調に輸出されており、2023 年の中国向け輸出量は、16.2 百万トンと前年（2.1 百万トン）より大幅に増加している。

とうもろこし－ブラジル

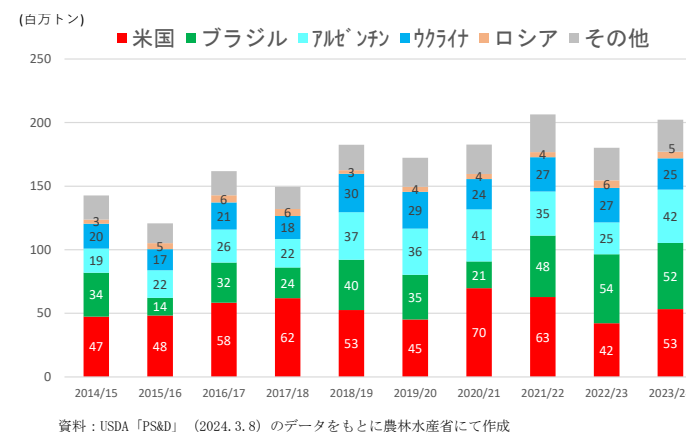
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割）

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 （見込み）	2023/24（24年3月～25年2月）		
			予測値、（ ）は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）
生 産 量	116.0	137.0	124.0（119.7）	-	▲ 9.5
消 費 量	70.5	76.5	78.5（80.6）	1.0	2.6
うち飼料用	59.5	63.5	64.5（65.5）	1.0	1.6
輸 出 量	48.3	54.3	52.0（47.0）	-	▲ 4.2
輸 入 量	2.6	1.3	1.2（2.2）	-	▲ 7.7
期末在庫量	4.0	11.5	6.2（4.6）	0.2	▲ 46.2
期末在庫率	3.3%	8.8%	4.7%（3.6%）	0.1	▲ 4.0
（参考）					
収穫面積（百万ha）	21.80	22.40	21.90（21.16）	-	▲ 2.2
単収（t/ha）	5.32	6.12	5.66（5.66）	-	▲ 7.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移
（ブラジルは減産により世界第 2 位の輸出国に後退）



< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、収穫面積の増加を受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、高温・乾燥により生産量が激減した前年度に比べ降雨に恵まれ単収が増加することを受けて、大きく回復する見通しから、55.6%増の 56.0 百万トンで史上最高となる見込み。

一方、アルゼンチン政府によれば、2 月 14 日時点でとうもろこしの作付けは完了。

ブエノスアイレス取引所週報 (2024.3.14) によれば、3 月上旬降雨があり、生育状況は改善している。作柄は、平年並み～良が 87%であり、開花や結実が順調に進んでいる。収穫進捗率は 3%と、収穫が開始されているものの、降雨を受けて収穫は遅れ気味となっている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 20.5%増の 14.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、昨年 10 月から本年 2 月までの好調な輸出ペースを受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てきていることに加え、ペソ安により輸出競争力が高まる見通しから、前年度より 68.0%増の 42.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～12 月の輸出量は 24.0 百万トンで、2022/23 年度産の減産を受け、前年度同期比 (35.7 百万トン) で 33%減となった。輸出先の内訳は、ベトナム (321.9 万トン)、ペルー (299.2 万トン)、アルジェリア (229.4 万トン) の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定しており、2022/23 年度のとうもろこし輸出上限数量は 20 百万トン。

2023 年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、カブート経済相は通貨ペソの公式レートを現行の 1 ドル=350 ペソから 50%以上切り下げ、1 ドル=800 ペソとした。なお、「OIL WORLD Weekly」(2024.2.2) によれば、政府は、とうもろこしの輸出税を 12%から 15%に引き上げることを検討していたものの、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間 12%のまま維持される見通し。ペソの更なる切下げも見送られている。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	36.0	56.0 (61.0)	1.0	55.6
消 費 量	14.2	11.7	14.1 (20.6)	-	20.5
うち飼料用	10.1	7.5	9.8 (15.5)	-	30.7
輸 出 量	34.7	25.0	42.0 (40.9)	1.0	68.0
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	1.8	1.1	1.0 (3.8)	-	▲ 7.2
期末在庫率	3.7%	3.0%	1.8% (6.2%)	-	▲ 1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	6.75	7.00 (8.20)	0.10	3.7
単収(t/ha)	6.97	5.33	8.00 (7.44)	0.03	50.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)

写真: 北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景 (2024 年 2 月 27 日撮影)



本圃場のとうもろこしの生育ステージは成熟期にある。
収穫作業は、3 月中旬を予定している。
予想単収は 9～11 トン/ヘクタールの見込み。

< 中国 > 単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、中国国家統計局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて、前年度より4.2%増の288.8百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家統計局「2023年糧食生産量データ」(2023.12.11)によれば、2023/24年度の実産量は前年より4.2%増の2億8,884万トン。播種面積が前年より2.7%増加したことに加え、単収が前年より1.5%増加したことが増産の要因。なお、東北地区の一部で降雨過多の影響があったものの、他の地域では天候に恵まれた。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし国際価格の低下等から、前年度より2.3%増の306.0百万トンと史上最高の見込み。背景には国内の堅調な食肉需要があり、中国国家統計局(2024.1.17)によれば、2023年の食肉生産量は9,641万トンと、前年同時期比で4.5%増。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国際価格が国内価格を下回っているほか、特に2022年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より22.9%増の23.0百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023年1～12月の輸入量は、前年より30.3%増の2,687.6万トン。内訳は、ブラジル(1,255.9万トン)、米国(714.1万トン)、ウクライナ(550.4万トン)の順。2023年12月のブラジル産輸入量は401.1万トンと前月比で34.9%増。2022年11月以降開始されたブラジル産とうもろこしの輸入が、2022/23年度の実産量の豊作による安価な輸出価格を受けて大幅に増加し、第1位の輸入先国となった。一方で、米国産の輸入量は前年より52.0%減の714万トンと、大幅に減少した。ウクライナ産の輸入量は前年より4.6%増の550.4万トンと、引き続き堅調に推移している。

USDAによれば、2023/24年度の実在庫量は、前月予測からの変更はなく、国内産の増産と輸入の増加により前年度より2.8%増の211.9百万トンの見込み。

とうもろこし—中国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	272.6	277.2	288.8 (288.8)	-	4.2	
消 費 量	291.0	299.0	306.0 (311.9)	-	2.3	
うち飼料用	209.0	218.0	225.0 (210.0)	-	3.2	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	21.9	18.7	23.0 (20.0)	-	22.9	
期末在庫量	209.1	206.0	211.9 (172.9)	-	2.8	
期末在庫率	71.9%	68.9%	69.2% (55.4%)	-	0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	44.22 (44.20)	-	2.7	
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.53 (6.53)	-	1.4	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC「Grain Market Report」(15 February 2024)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

(輸入量：万トン、シェア：%)

2023年12月			2023年1月～2023年12月			2022年1月～2022年12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	401.1	81.0	ブラジル	1,255.9	46.7	米国	1,487.8	72.1
米国	64.7	13.1	米国	714.1	26.6	ウクライナ	526.4	25.5
ウクライナ	13.8	2.8	ウクライナ	550.4	20.5	ミャンマー	19.4	0.9
ミャンマー	5.3	1.1	ブルガリア	74.1	2.8	ブルガリア	14.7	0.7
ブルガリア	4.7	1.0	ミャンマー	34.3	1.3	ロシア	9.3	0.5
ロシア	2.8	0.6	ロシア	29.3	1.1	ラオス	5.2	0.2
その他	2.6	0.5	その他	29.5	1.1	その他	0.6	0.0
計	495.0	100	計	2,687.6	100	計	2,063.4	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成。

＜ ウクライナ ＞ 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 29.9%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、直近の収穫結果を受けて前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、前年度より収穫面積が減少（前年度比 6.2%減）も、天候に恵まれ単収が上昇（前年度比 16.3%増）したことを受け、前年度より 9.3%増となった。ただ、侵攻前の史上最高の豊作だった 2021/22 年度比では 29.9%減の 29.5 百万トンとなる見通し。

ウクライナ農業政策食料省によれば、3 月 7 日現在、収穫進捗率は 93%と、前年度同期（96%）よりやや遅れている。単収は 3 月 7 日時点で 7.80 トン/ヘクタールと、前年度より 17%増となる見通し。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給増を受けて前年度より 2.0%増の 5.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、臨時回廊による輸出増を受けて前月予測から 1.5 百万トン上方修正されたものの、2023/24 年度の期首在庫の減少、黒海穀物イニシアティブの停止、主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 9.7%減、侵攻前の 2021/22 年度からも 9.3%減の 24.5 百万トンの見込み。オデーサ港から陸路を経由せず直接臨時回廊を経由するルートによる輸出も増加しつつあり、中国をはじめとする世界各国への輸出が可能となっている。

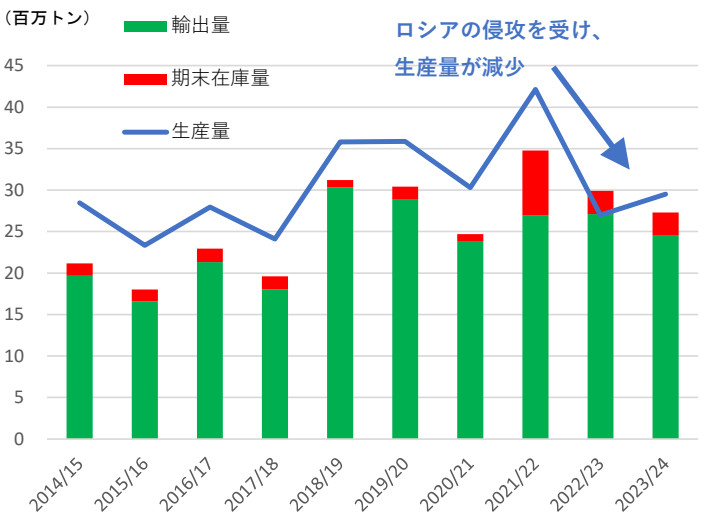
ウクライナ政府等によれば、2023 年 10 月～2024 年 2 月の輸出量は 1,257.8 万トン（海上輸送、陸路等による全ての輸出が含まれる）と、臨時回廊により輸出量が増加（2023 年 7～9 月平均と比較し、月平均で 189.9%増）したものの、黒海穀物イニシアティブが履行されていた前年同時期比では 5.8%減。輸出先国は、スペイン（374.4 万トン）、中国（194.1 万トン）、エジプト（168.8 万トン）、オランダ（117.5 万トン）、イタリア（114.0 万トン）の順。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、生産量の引下げ及び輸出量の引上げを受けて前月予測から 2.5 百万トン下方修正されたものの、増産による供給増から前年度より 0.7%増の 2.8 百万トンの見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前年度から 0.8 ポイント増の 9.6%となる見込み。

とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	42.1	27.0	29.5 (30.0)	▲ 1.0	9.3	
消 費 量	8.2	4.9	5.0 (6.3)	－	2.0	
うち飼料用	7.2	4.0	4.0 (4.5)	－	－	
輸 出 量	27.0	27.1	24.5 (19.5)	1.5	▲ 9.7	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	－	－	
期末在庫量	7.8	2.8	2.8 (5.5)	▲ 2.5	0.7	
期末在庫率	22.2%	8.7%	9.6% (21.5%)	▲ 9.4	0.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	3.80 (4.06)	▲ 0.20	▲ 6.2	
単収(t/ha)	7.68	6.67	7.76 (7.40)	0.13	16.3	
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(8 March 2024) IGC 「Grain Market Report」(15 February 2024)						

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2024. 3. 8) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・フィリピン等で下方修正されたものの、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

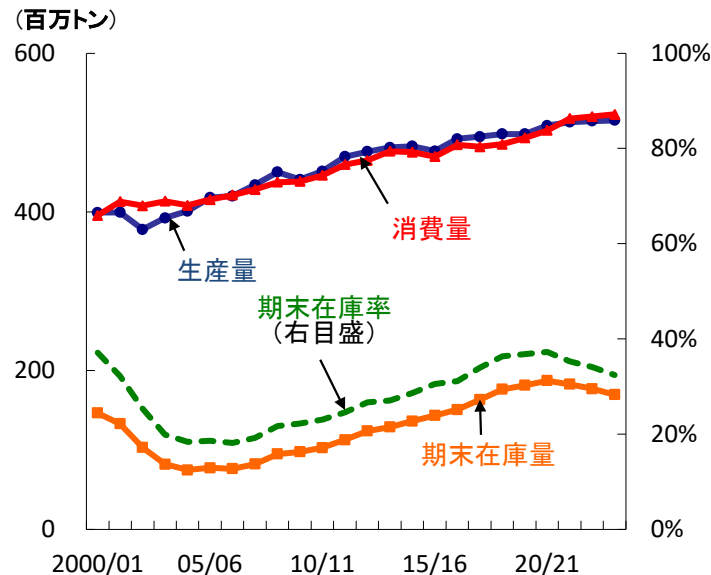
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・パキスタン等で上方修正されたものの、タイやEU等で下方修正され、前月からわずかに下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・パキスタン、タイ、ベトナム等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



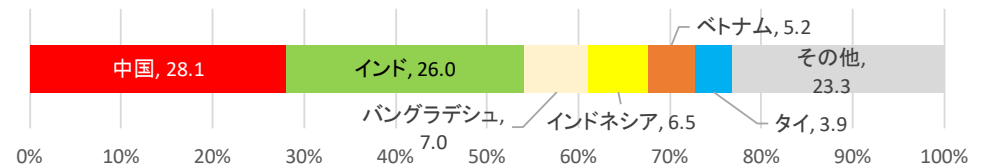
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

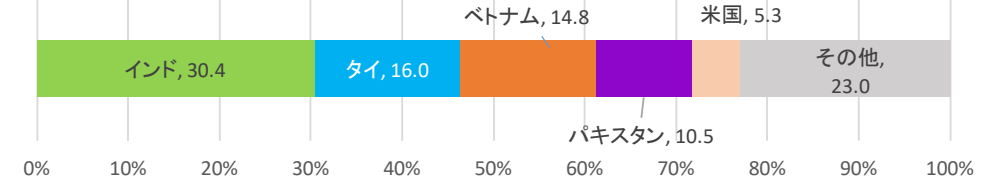
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.1	514.6	515.4	1.7	0.2
消 費 量	517.8	520.2	522.9	▲ 0.0	0.5
輸 出 量	56.9	54.3	52.6	1.0	▲ 3.1
輸 入 量	54.5	55.2	50.1	0.8	▲ 9.3
期末在庫量	182.8	177.2	169.7	2.5	▲ 4.2
期末在庫率	35.3%	34.1%	32.5%	0.5	▲ 1.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 March, 2024)

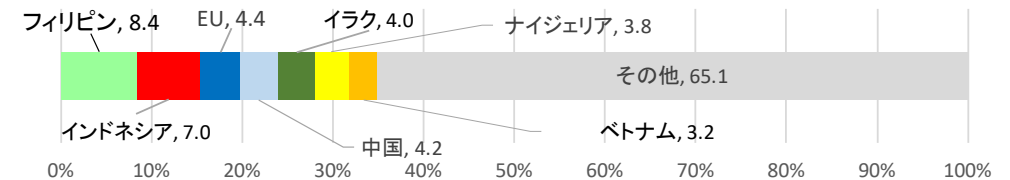
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(515.4百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(52.6百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(50.1百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2月の降雪で2024年の中・短粒種向け灌漑用水源が補給

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度比36.4%増の6.9百万トンの見込み。特に2年連続の干ばつに見舞われ生産量が激減していた中・短粒種の生産量が2.0百万トンと、前年度比で204.0%に大きく回復することが要因。長粒種の生産量は4.9百万トンと、前年度比で19.8%増加。

カリフォルニア州水資源部によると、2024年の中・短粒種向け灌漑用水源となるシエラネバダ山脈の降雪量は、1月以降降雪があり、2月末には平年の約80%の水準まで回復した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給量増加の見込みから、前年度比11.5%増の5.1百万トンと、史上最高の見込み。

2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、2023年8月～12月にかけてタイ等アジア諸国から食用の香米の輸入が当初予想を上回ったことや、本年1月～7月も輸入が継続される見込みから、前年度比7.9%増の1.4百万トンと、史上最高となる見込み。

2023/24年度の輸出量は、1月下旬からの長粒種の輸出ペースが予想を上回り、本年7月までは同ペースでの輸出が継続される見込みから、前月予測よりわずかに上方修正された。国内生産量の増加と、それに伴う価格競争力の改善から、前年度比36.8%増の2.8百万トンの見込み。2023/24年度(2023年8月1日～2024年2月29日)の主な輸出先国はメキシコ(53.8万トン)、日本(20.7万トン)、ハイチ(20.0万トン)の順。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.3.8)によれば、3月5日までの週のイラク向け長粒種(2等、碎米4%混入)の価格は800ドル/トンと、中南米及びメキシコからの需要増大を受け、前月より35ドル/トン上昇した(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。地中海向けカリフォルニア米(1等、碎米4%混入)である中粒種の2月6日までの週の価格は、生産量の増加見込みを受け950ドル/トンと、2023年9月初旬の史上最高値から700ドル/トン下落し、昨年12月上旬以降、2021年5月以来の安値となっている。

期末在庫量は、輸出量の上方修正を受けて、前月予測からわずかに下方修正されたものの、前年度より37.5%増の1.3百万トンの見込み。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

(単位: 百万精米トン)

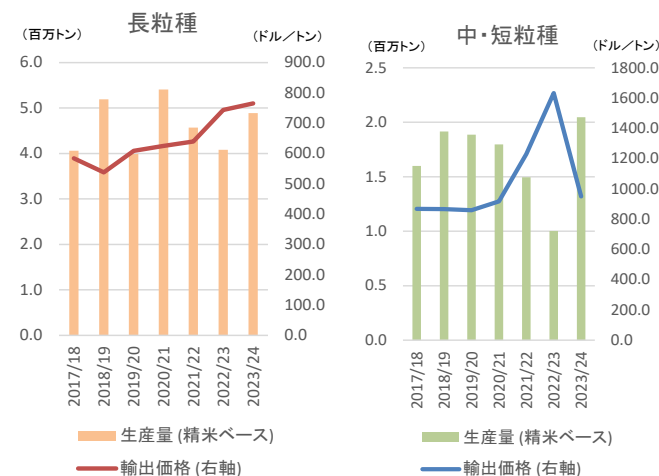
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	5.1	6.9	-	36.4
消 費 量	4.7	4.6	5.1	-	11.5
輸 出 量	2.7	2.0	2.8	0.0	36.8
輸 入 量	1.2	1.3	1.4	-	7.9
期末在庫量	1.3	1.0	1.3	▲ 0.0	37.5
期末在庫率	17.1%	14.4%	16.6%	▲ 0.4	2.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.00	0.88	1.16	-	31.8
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.57	-	3.5

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2024)

図: 米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料: USDA「Rice Outlook」(2024.2.12)より。価格は年度内の平均価格。なお、2023/24年度は2024年2月の価格。

< インド > ラビ米の生育は良好、田植えは2月末までに概ね終了

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測から2.0百万トン上方修正され134.0百万トンと、前年度比で1.3%減も、過去5年平均比で7.2%増の見込み。単収は4.19もみトン／ヘクタールと、前月から0.02もみトン／ヘクタール下方修正され、前年度比1.6%減となったものの、作付面積が48.00百万ヘクタールと前月から1.00百万ヘクタール上方修正され、前年度より0.4%増加したことが要因。

現地情報によると、米の二期作エリアである西ベンガル州では、現在分げつ期にあり、生育は順調とのこと。今年度の田植は2月末までに概ね終了したとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、政府が11月初旬に、2024年1月以降の穀物配給計画を5年間（2028年まで）延長したことで、人口増加に伴い配給対象者も増加する見込みから、前年度比3.0%増の118.0百万トンの見込み。政府の配給プログラムは8.13億人が対象となっており、コメ等が低所得世帯向けに無償又は低価格で配給される見込み。2023/24年度の調達量は、53～54百万トンと、政府の設定水準（42～44百万トン）を大きく上回る見込み（インド全体の消費量の半分に相当）。

2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、輸出規制強化による直近の輸出量減少で、前年度比21.0%減の16.0百万トンの見込み。ただ依然として世界第1位の輸出シェアを維持しており、約30%を占める。2023年1月から12月までの主な輸出先国は、ベナン（151.9万トン）、サウジアラビア（123.5万トン）、セネガル（93.7万トン）の順。サウジアラビア向けはバスマティ米の輸出が主流となっている。

なお、インドは、非バスマティ米を中心に、2022年9月9日以降、様々な輸出規制を発動・強化している。本年2月21日には、インド財務省が、本年3月31日までの予定だったパーボイルド米の20%の輸出関税を無期限に延長した。詳細は右表を参照のこと。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2024.3.8）によれば、インド産米（碎米5%混入）の価格は、輸出規制強化後のデータが提示されていない。なお、規制前の2023年7月時点の輸出価格は485ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で最低水準の価格となっていた（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

2023/24年度の期末在庫量は、生産量の上方修正を受け、前月予測から2.0百万トン上方修正され、前年度と同水準の35.0百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	129.5	135.8	134.0 (129.3)	2.0	▲ 1.3	
消 費 量	110.5	114.5	118.0 (113.7)	-	3.0	
輸 出 量	22.0	20.3	16.0 (13.3)	-	▲ 21.0	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	34.0	35.0	35.0 (36.1)	2.0	-	
期末在庫率	25.7%	26.0%	26.1% (28.4%)	1.5	0.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.28	47.83	48.00 (47.70)	1.00	0.4	
単収(もみt/ha)	4.20	4.26	4.19 (2.85)	▲ 0.02	▲ 1.6	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2024)、
IGC「Grain Market Report」(15 February, 2024)（単収は精米t/ha）

表：インドのコメ輸出規制(2022年9月9日～)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの粳 (HS 1006 10)	輸出税（20%）	2022.9.9～
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税（20%）	2022.9.9～
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	関税：12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t) 最低輸出価格導入（1,200 ドル/トン→950ドル/トンに引き 下げ（2023.10.26～））	— 2023.8.27～
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税（20%）	2023.8.25～
バスマティ米・パーボ イルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20～ 2024.12.31
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9～

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。
※有機米は本措置の対象外。
資料：インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成。

＜ 中国 ＞ 温暖な気候により広東省等で早稲の播種が進む

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2023年7～9月の豪雨等により東北部(特に吉林省、黒竜江省及び遼寧省)で播種面積が引き下げられたことを受け、前年度比0.9%減の144.6百万トンの見込み。ただし、良好な土壌水分等を受け、単収は史上最高の見込み。なお東北部では、政府による大豆作付推進政策の反動を受けコメ作付面積が減少傾向にある。

東部では、2月下旬に平年より低い気温が続いた後、3月上旬になり温暖な気候となった。南部及び南東部では、3月上旬の週の平均気温が10度を超え、早稲の播種が促進された。東部の福建省等で降雨量が10mm以下と少なかったが、南東部の広東省等では、地域によっては50mm近くの豪雨となった。

中国国家统计局「2023年糧食生産量データ」(2023.12.11)によれば、2023年のコメの播種面積は28.9百万ヘクタールと、前年比1.7%減少した。他方で、単収は、天候に恵まれたことも受けて7.1トン/ヘクタールと、前年比0.8%増加した。生産量(もみベース)は206.6百万トンと、前年比0.9%減少した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし等飼料用作物の価格低下を受けた飼料用米の需要減少から、前年度比3.3%減の149.9百万トンの見込み。

2023/24年度の輸入量は、インドの輸出規制や国際コメ価格の高騰から、前月予測からの変更はなく、前年度比52.1%減の2.1百万トンの見込み。中国はこれまで、もち米や香米に加え、特にとうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、代替としてインド等から砕米を輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は規制前の年度(2021/22年度、6.0百万トン)と比較して65.0%減少している。中国海関統計によれば、2023年12月の輸入量は23.2万トン(前年同月比44.5%減)、同年1～12月の輸入量は263.6万トン(前年同期比58.2%減)となった。輸入国別では、1位がベトナム(35.4%)、2位はミャンマー(19.8%)、3位がタイ(19.7%)の順。

一方、USDAによると、「一帯一路」政策の賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っており、2023/24年度の輸出量は、前年度比14.9%増の2.0百万トンとなっている。主要輸出先には、同政策の賛同国であるエジプトやトルコ、パプアニューギニアが含まれている。

期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度比4.9%減の101.4百万トンの見込み。ただし、インドの期末在庫量(35.0百万トン)と合計すると世界の期末在庫量の約80%を占める。

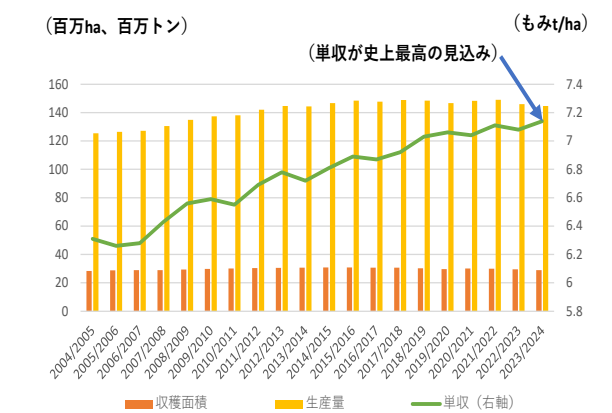
コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	149.0	146.0	144.6 (144.6)	-	▲ 0.9
消費量	156.4	155.0	149.9 (148.0)	-	▲ 3.3
輸出量	2.1	1.7	2.0 (2.2)	-	14.9
輸入量	6.0	4.4	2.1 (2.8)	-	▲ 52.1
期末在庫量	113.0	106.6	101.4 (101.5)	-	▲ 4.9
期末在庫率	71.3%	68.0%	66.7% (67.6%)	-	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	28.95 (29.45)	-	▲ 1.7
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.14 (4.96)	-	0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2024)
IGC「Grain Market Report」(15 February, 2024) (単収は精米t/ha)

図： 中国の生産量、収穫面積、単収の推移
(2004/05～2023/24年度)



資料：USDA「PS&D」(2024.3.8)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 乾季米は灌漑用水不足や高温等から減産見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2023年5月から9月中旬にかけての平年を下回る降雨量から、前年度比4.4%減の20.0百万トンの見込み。

USDA及び現地情報によると、11月中旬から続く乾期において、米の主要産地である北部、東北部及び中部では、特に2月に降雨がほとんどなく、降雨量は例年に比べて大幅に少なかった。2月から3月上旬の気温は、タイのほぼ全土で40度近くまで上昇し、4月のような記録的な高温に見舞われた。こうした中、乾季米が作付けされており、灌漑用水が不足する場合は単収減少の可能性がある。

アセアン食料安全保障情報システム(2024.3)によると、乾季米は穂ばらみ期から収穫期にある。作付面積は1.46百万ヘクタールと、灌漑用水不足や降雨不足から前年よりわずかに減少も、国際価格の上昇期待から、政府計画面積を13%も上回った。水不足や高温に加え、1日の寒暖差が激しかったことから、中央部でイネ白葉枯病が発生し、単収は昨年度より減少する見込み。

USDAによると、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、タイ政府による収穫面積の増加見込み(11.07百万ヘクタールと史上最高)等を受け、2021/22年度比5.0%増の20.9百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、インドネシアの需要増加を受け、前月予測から0.2百万トン上方修正されたものの、減産見込みから、前年度比3.9%減の8.4百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22年度比13.0%増の8.7百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2024年1月の輸出量は、前年同期比17.6%増の94.8万トンとなった。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の17.7万トンから大幅増の29.2万トンと、最大の輸出先国となった。また、エルニーニョ現象による降雨不足で減産が見込まれるフィリピンは、11.3万トン(前年同期0.6万トン)、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは8.8万トン(同7.8万トン)、米国は6.4万トン(同5.2万トン)をそれぞれ輸入した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.3.8)によれば、3月5日までの週のタイ産米(長粒、2等精米)の輸出価格は、新穀の流入から値を下げ、前月から14ドル/トン下落し、616ドル/トンとなった(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。なお、2023年12月中旬以降、不安定な情勢が続く紅海を迂回することによる、欧州や中東向けの輸送コストの増加や輸送日数の増加が懸念されている。

期末在庫量は、輸出量の上方修正から前月より0.1百万トン下方修正され、減産予測から前年度比18.2%減の3.2百万トンの見込み。

コメント

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位: 百万精米トン)					
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)		
			予測値、〇はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.9	20.9	20.0 (19.7)	-	▲ 4.4
消 費 量	12.5	12.5	12.4 (12.9)	▲ 0.1	▲ 0.8
輸 出 量	7.7	8.7	8.4 (8.3)	0.2	▲ 3.9
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	100.0
期末在庫量	4.1	3.9	3.2 (3.1)	▲ 0.1	▲ 18.2
期末在庫率	20.5%	18.1%	15.1% (14.4%)	▲ 0.6	▲ 3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.70	11.07	10.65 (11.00)	-	▲ 3.8
単収(もみt/ha)	2.81	2.86	2.85 (1.89)	-	▲ 0.3
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」 (8 March, 2024) IGC 「Grain Market Report」 (15 February, 2024) (単収は精米t/ha)					

表: タイの国別輸出量

(単位:万トン)			
国名	2023年 1月	2024年 1月	増減量
1 インドネシア	17.7	29.2	11.5
2 フィリピン	0.6	11.3	10.7
3 イラク	7.8	8.8	1.0
4 米国	5.2	6.4	1.3
5 日本	5.9	2.9	-3.0
6 中国	3.4	2.6	-0.8
7 モザンビーク	0.9	2.3	1.4
8 南アフリカ	6.0	1.9	-4.2
9 マレーシア	0.1	1.7	1.6
10 カナダ	0.6	1.6	0.9
計	80.6	94.8	14.2 (前年比17.6%増)

資料: タイ関税局 (2024.3)

＜ ベトナム ＞ 南部メコンデルタ地域の冬春作（乾季米）の単収は海水侵入で減少

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が過去最高だった前年度の水準からわずかに減少も、収穫面積の増大により、前年度比 0.2%増の 27.0 百万トンの見込み。なお、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量が史上最高となった 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に緩やかな低下傾向にある。

アセアン食料安全保障情報システム（2024.3）によると、①北部は、冬春作（乾季米）の播種期及び生育初期にある。播種面積は 0.77 百万ヘクタールで、灌漑用水が豊富なことから生育は順調。②南部では、冬春作（乾季米）が収穫期にある。1.88 百万ヘクタールの作付面積のうち、現時点の収穫面積は 0.27 百万ヘクタール（14.4%）。海水の侵入により単収は前年度より減少見込み。現在、メコンデルタ地域の海水の侵入は最大水準となっており、本年 4 月末から 5 月にかけて、高い水準が継続する見込み。晩期の冬春作の 2.9 万ヘクタール以上が海水に浸かると予想される。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、2023 年 12 月 1 日以降、降雨不足で単収減少懸念が生じているフィリピン向け需要増加から、前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、アジア諸国等からの精米輸入需要が落ち着く見込みから、前年度比 5.2%減の 7.8 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量は、フィリピンによる史上最高の輸入量の継続見込みや、インドネシアの 2023 年中の追加需要を受け、8.2 百万トンと前年度比 15.5%増で史上最高の見込み。特にインドネシアは、エルニーニョ等によるコメの減産見込みや、燃料価格高騰による投入財費用の高騰から、国内コメ価格が上昇。価格抑制のための在庫放出に加え、低所得世帯へのコメ配給等を受け、政府が設定する最低水準以下に在庫が低下。これを補うため、2023 年（1～12 月）は合計 306.3 万トンを輸入し、うちベトナム産の輸入は 114.8 万トン（37.5%）。なお、2024 年 1～4 月のコメの収穫量も前年比で減少する見込みから、インドネシア政府は合計 360 万トンの輸入枠を決定した。

ベトナム関税総局によれば、2024 年 1～2 月の輸出量は 107.5 万トンと、前年同期（89.3 万トン）に比べ 14.4%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（50.0 万トン、124.4%増）、インドネシア（21.9 万トン、152.4%増）、マレーシア（3.8 万トン、212.3%増）、ガーナ（2.7 万トン、408.9%増）の順。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2024.3.8）によれば、ベトナム産米（長粒種、5 %碎米混入）の 3 月 5 日までの週の価格は、冬春作の収穫開始とインドネシアの需要の軟化から、前月の価格より 58 ドル／トン下落し、587 ドル／トンとなった。

コメーベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1月～24年12月)			
			予測値、○はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、○はIGC			
生 産 量	26.7	26.9	27.0 (28.0)		-	0.2
消 費 量	21.4	21.4	21.2 (21.9)		-	▲ 0.9
輸 出 量	7.1	8.2	7.8 (8.0)		0.2	▲ 5.2
輸 入 量	1.7	1.8	1.6 (1.6)		0.2	▲ 11.1
期末在庫量	2.7	1.8	1.4 (2.7)		-	▲ 22.6
期末在庫率	9.3%	6.0%	4.7% (8.9%)		▲ 0.0	▲ 1.2
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.10	7.10	7.15 (7.11)		-	0.7
単収(もみt/ha)	6.01	6.07	6.05 (3.90)		-	▲ 0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (8 March, 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (15 February, 2024) （単収は精米t/ha）

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain：World Markets and Trade」（2024.3.8）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・ブラジル、南アフリカで下方修正され前月から下方修正された。史上最高の見込み。

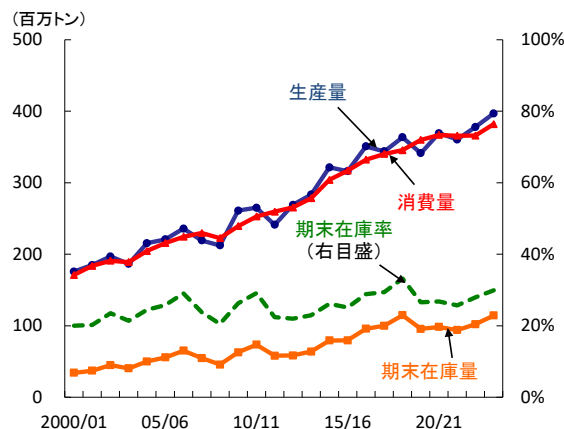
消費量 前年度比  前月比 

・ブラジル等で下方修正され前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・南アフリカ等で下方修正されたものの、ブラジル、ウクライナで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」(2024.3.8)をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

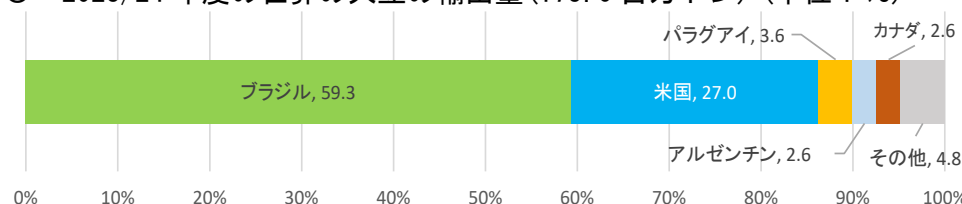
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	360.4	378.1	396.9	▲ 1.4	5.0
消費量	365.8	365.9	381.9	▲ 1.1	4.4
うち搾油用	316.6	315.2	328.2	▲ 1.1	4.1
輸出量	154.2	172.0	173.6	3.0	1.0
輸入量	155.3	168.0	170.8	2.9	1.6
期末在庫量	93.9	102.2	114.3	▲ 1.8	11.9
期末在庫率	25.7%	27.9%	29.9%	▲ 0.4	2.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 March 2024)

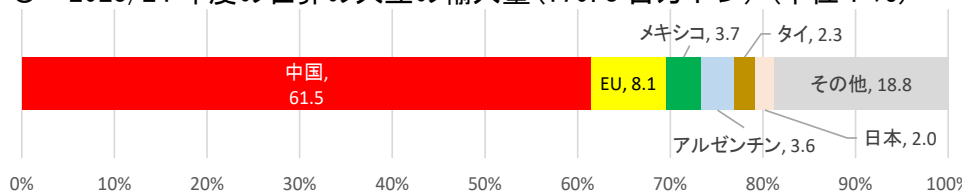
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (396.9 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量 (173.6 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (170.8 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 収穫面積の減少により、生産量は前年度より 2.5%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度より 2.5%減の 113.3 百万トンの見通し。肥料価格の高騰が前年度から落ち着いたことを受けた大豆からとうもろこしへの作付転換により、大豆の収穫面積が減少したとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 4.8%増の 66.0 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 13.7%減の 46.8 百万トンの見込み。前年度の実産量が史上最高となったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。また、米国国内のバイオ燃料用消費量が増加していることも背景にあるとみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は前月予測からの変更はなく、前年度より 19.2%増の 8.6 百万トンとなる見込み。期末在庫率は 7.6%で、過去 3 年平均（6.0%）を上回るものの、過去 5 年平均（11.0%）を下回っており、引き続き低水準に留まる見通し。

USDA 「Oilseeds: World Markets and Trade」(2024.3.8) によれば、本年 3 月の米国の実大豆価格は、3 月 4 日現在、ブラジルにおける収穫進展による世界的な豊作基調を受けて、前月から 18 ドル/トン下落し 449 ドル/トン。

USDA によれば、2023 年 9 月～2024 年 2 月の輸出量は 3,410 万トンと、ブラジルとの激しい輸出競争を受けて前年度同時期の 4,145 万トンより 17%減。内訳は中国（2,126.7 万トン）、メキシコ（284.8 万トン）、ドイツ（146.5 万トン）の順となっている。

USDA によれば、米国政府は、温室効果ガス排出削減のため、様々な原料のバイオマス利用を奨励している。2022/23 年度における主要な植物油のバイオ燃料向け生産量は前年度比 30.8%増の 8.7 百万トン。そのうち、大豆油のバイオ燃料向け生産量は前年度比 20.2%増の 5.7 百万トンで史上最高。2022/23 年度の実大豆油は増産となったものの、国内のバイオマス利用に向けられ輸出量が歴史的な低水準に留まったため、今後も動向を注視する必要。

大豆－米国

(単位：百万トン)

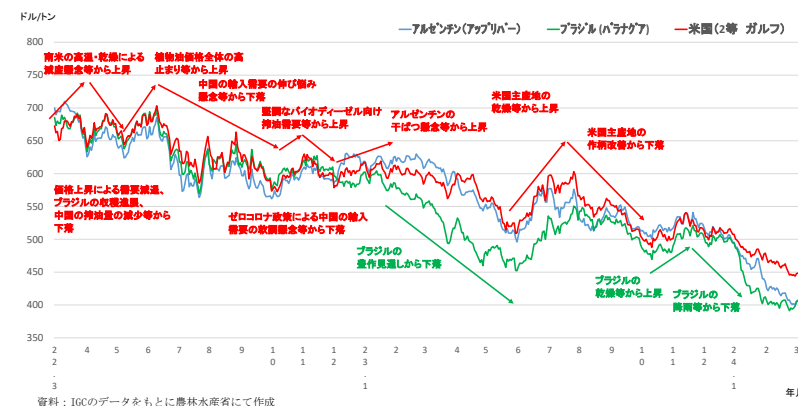
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 9 月～24年 8 月) 予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	121.5	116.2	113.3	-	▲ 2.5
消 費 量	62.9	63.0	66.0	-	4.8
うち搾油用	60.0	60.2	62.6	-	4.0
輸 出 量	58.6	54.2	46.8	-	▲ 13.7
輸 入 量	0.4	0.7	0.8	-	22.4
期末在庫量	7.5	7.2	8.6	-	19.2
期末在庫率	6.2%	6.1%	7.6%	-	1.5

(参考)

収穫面積(百万ha)	34.92	34.87	33.33	-	▲ 4.4
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.40	-	2.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (8 March 2024)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量 (CONAB) は前年度より 5.0%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、主要生産州の中西部パラナ州の収穫量の減少やサンパウロ州での悪天候により、前月予測から 1.0 百万トン下方修正されて 155.0 百万トン。作付面積は史上最高となるものの、単収が減少することから、生産量は史上最高の前年度より 4.3%減も、引き続き高水準を維持している。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2024.3.12) によれば、2023/24 年度の実産量は、とうもろこし等から収益性が高い大豆に作付けがシフトすることで収穫面積が増加するものの、生育初期の高温乾燥による単収減から前年度より 5.0%減の 146.9 百万トンの見通し。主要生産州の中西部マツト・グロッソ州とパラナ州、南東部サンパウロ州等における降雨不足と高温を受けて、前月予測から下方修正された。

USDA によれば、3 月上旬降雨があり、夏作物の生育に必要な土壌水分量が保たれた。パラナ州の収穫進捗率は 64%と、前年同期 (30%) を上回り、収穫作業が急速に進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、減産による供給減を受けて前月予測から 0.8 百万トン下方修正され、前年度より 0.3%減の 56.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、年度前半の好調な輸出ペースを受けて前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、生産量が 2 年連続で高水準を維持し、価格競争力も高まる見込みから、前年度より 7.8%増の 103.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 1～2 月の輸出量は 9.5 百万トンで、前年度同時期 (5.9 百万トン) に比べ 61.0%増となっており、中国向け輸出が昨年に引き続き堅調に推移していることが要因。輸出先は、中国 (6.9 百万トン)、スペイン (0.4 百万トン)、タイ (0.4 百万トン) の順。大豆収穫後の 3 月となり、輸出最盛期に入っている。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ港と南部のサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。さらに、マツト・グロッソ州から南部サントス港まで輸送する鉄道の拡張工事も行われており、これらのアクセス改善が輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

大豆ーブラジル

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	130.5	162.0	155.0 (150.5)	▲ 1.0	▲ 4.3
消 費 量	54.0	56.9	56.8 (56.5)	▲ 0.8	▲ 0.3
うち搾油用	50.7	53.1	53.0 (53.5)	▲ 0.8	▲ 0.2
輸 出 量	79.1	95.5	103.0 (95.1)	3.0	7.8
輸 入 量	0.5	0.2	0.5 (0.5)	-	200.0
期末在庫量	27.6	37.4	33.1 (1.4)	▲ 3.3	▲ 11.5
期末在庫率	20.7%	24.5%	20.7% (0.9%)	▲ 2.4	▲ 3.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.60	44.60	45.90 (41.49)	-	2.9
単収(t/ha)	3.14	3.63	3.38 (3.63)	▲ 0.02	▲ 6.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC「Grain Market Report」(15 February 2024)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2023/24年度の実産量は、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年												2024年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												収穫 23.4(百万t)								
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 20.4百万ha												作付 16.4(百万ha)								
大豆	マツト・グロッソ州、パラナ州等												収穫 146.9(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート (2024. 3. 12)

＜ アルゼンチン ＞ 2023/24 年度の生産量は、前年度より倍増

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を強く受け大幅な減産となった前年度から回復する見通しから、前年度の 2 倍の 50.0 百万トンの見込み。

2 月 14 日現在、作付けは完了。3 月上旬、生育初期を迎えており、ブエノスアイレス取引所週報（2024.3.14）によれば、3 月上旬、北部及び中部で降雨があり、生育状況は改善している。作柄は、平年並み～良が 84%と、前週より 2 ポイント上昇している。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比 16.9%増の 42.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 32.7%減の 6.1 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 9.8%増の 4.6 百万トンの見込み。

なお、2023 年 1～12 月の輸出量は、前年度の干ばつによる減産を受けて 185.9 万トンで前年度（550.6 万トン）より 66%減。輸出先は、中国（160.6 万トン）、米国（7.5 万トン）、チリ（2.0 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2 %引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

2023 年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、経済相は通貨ペソの公式レートを現行の 1 ドル＝350 ペソから 50%以上切り下げ、1 ドル＝800 ペソにした。また、大豆の輸出税は引き続き最大 33%に設定すると発表した。

なお、「OIL WORLD Weekly」（2024.2.2）によれば、政府は、大豆油及び大豆粕の輸出税を 31%から 33%に引き上げることを検討していたものの、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間 31%のまま維持される見通し。ペソの更なる切下げも見送られている。

大豆ーアルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	43.9	25.0	50.0 (48.0)	-	100.0
消 費 量	46.0	36.6	42.8 (45.8)	-	16.9
うち搾油用	38.8	30.3	35.5 (39.3)	-	17.1
輸 出 量	2.9	4.2	4.6 (5.6)	-	9.8
輸 入 量	3.8	9.1	6.1 (5.7)	-	▲ 32.7
期末在庫量	23.9	17.2	26.0 (8.1)	-	50.8
期末在庫率	48.9%	42.2%	54.8% (15.8%)	-	12.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.90	14.40	16.50 (15.87)	-	14.6
単収(t/ha)	2.76	1.74	3.03 (3.02)	-	74.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (8 March 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (15 February 2024)

写真：北部サンタフェ州の大豆の圃場風景
(2024 年 2 月 27 日撮影)



本圃場の大豆は、通常より遅い 11 月中旬に作付された。生育ステージは黄熟期から成熟期にあり、莢付きは良い。単収は、2 月の降雨を受けて、3.5～4 t/ha と比較的高い見込み。収穫作業は 4 月初旬を予定している。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、中国国家统计局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて前年度より 2.8%増の 20.8 百万トンで史上最高の見込み。

中国国家统计局「2023 年糧食生産量データ」（2023.12.11）によれば、2023 年の生産量は前年より 2.8%増の 2,084 万トン。播種面積が前年より 2.2%増加し、単収も前年より 0.5%増加したことが要因。

2 月 3 日に発表された中国共産党・国务院（内閣に相当）の中央一号文件には、引き続き大豆の作付け確保や単収の向上等の取組等について記載された。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な食料需要に加え、国内の畜産物需要から大豆粕需要が増加することから、前年度より 3.4%増の 120.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、ブラジル等の主要輸出国の直近の輸出実績を受けて前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、ブラジルからの輸入増により前年度より 0.5%増の 105.0 百万トンと史上最高の見込み。輸入された大豆は、在庫の増加だけでなく、国内の大豆粕及び大豆油の生産にも向けられるとみられる。

農業農村部によれば、2023 年 1～12 月の輸入量は、前年より 0.4%減の 9,577 万トンと前年並み。内訳は、ブラジル（6,750.0 万トン）、米国（2,309.2 万トン）、アルゼンチン（204.7 万トン）の順となっている。ブラジルと米国を合わせたシェアが 9 割以上を占める一方、前年 12 月はアルゼンチン、カナダ、南アフリカからの輸入量が前月から大幅に増加しており（それぞれ 259%増、413%増、前月なし）、輸入国の多様化に取り組んでいるとみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、輸入増を受けて前月予測から 1.6 百万トン上方修正され、前年度より 16.2%増の 37.6 百万トンと史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測から 1.3 ポイント上方修正され、前年度より 3.7 ポイント増の 31.2%となる見込み。

大豆－中国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	16.4	20.3	20.8 (20.8)	-	2.8	
消 費 量	110.3	117.5	120.5 (120.5)	-	2.6	
うち搾油用	90.0	96.0	98.0 (100.0)	-	2.1	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	11.1	
輸 入 量	90.3	104.5	105.0 (101.8)	3.0	0.5	
期末在庫量	25.2	32.3	37.6 (40.8)	1.6	16.2	
期末在庫率	22.8%	27.5%	31.2% (33.9%)	1.3	3.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.47 (8.40)	-	2.2	
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.99 (1.95)	-	0.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
IGC「Grain Market Report」(15 February 2024)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年12月			2023年 1 月～2023年12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	498.0	50.7	ブラジル	6,750.0	70.5
米国	384.9	39.2	米国	2,309.2	24.1
アルゼンチン	39.0	4.0	アルゼンチン	204.7	2.1
カナダ	37.1	3.8	カナダ	139.4	1.5
南アフリカ	10.8	1.1	ロシア	123.8	1.3
ロシア	10.3	1.0	エチオピア	13.1	0.1
その他	2.2	0.2	その他	36.4	0.4
計	982.3	100	計	9,576.6	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< カナダ > 2024/25 年度の生産量は 6.9 百万トンの見込み (AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2024.3.19）によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 6.7%増、過去 5 年平均比も 6.8%増の 7.0 百万トンの見込み。単収が 3.09 トン/ヘクタールと、前年度並みの史上最高となり、収穫面積が 2.26 百万ヘクタールと前年度より 6.6%増と大幅に増加することによる。

カナダ統計局「Principal field crop areas, 2024」（2024.3.11）によれば、2024/25 年産の作付意向面積は前年度より 1 %減の 226 万ヘクタールとなった。カナダ産大豆は、主産地がカナダ東部であり、最大生産州のオンタリオ州では前年度より 4.3%増の 121 万ヘクタールとなる一方、マニトバ州及びケベック州では前年度よりそれぞれ 7.2%減の 61 万ヘクタール、3.9%減の 39 万ヘクタールとなり、全体として微減となった。

AAFC によれば、2024/25 年度の実産量は、作付面積が前年より減少することを受け、前年度から 1 %減の 6.9 百万トンの見込み。大豆価格が低下しているものの、大豆粕需要と輸出は堅調であり、生産量は微減に留まるとみられる。土壌水分量は現時点で十分とみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 12.2%増の 2.9 百万トンの見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 7.3%増の 4.6 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2023/24 年度（2023 年 8 月～2024 年 7 月）の 2023 年 8 月～2024 年 1 月の輸出量は 302.0 万トンで、前年度（293.4 万トン）を上回っている。国別では、中国（127.2 万トン）が 40%以上のシェアを占め、次いでイラン（54.6 万トン）、アルジェリア（52.0 万トン）、イタリア（15.0 万トン）の順となっている。

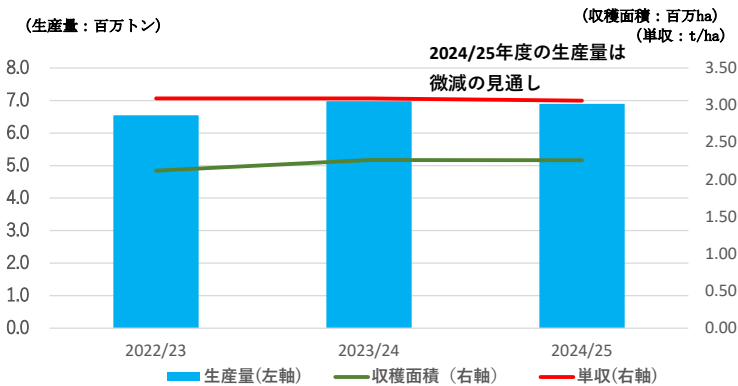
AAFC によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、増産により前年度から 26.3%増の 0.5 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.2	6.5	7.0 (7.0)	-	6.7
消 費 量	2.3	2.6	2.9 (2.5)	-	12.2
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.8)	-	6.4
輸 出 量	4.3	4.2	4.6 (4.9)	-	7.3
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	-
期末在庫量	0.4	0.6	0.7 (0.4)	-	4.8
期末在庫率	6.5%	9.5%	9.1% (5.7%)	-	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.26 (2.26)	-	6.6
単収(t/ha)	2.99	3.09	3.09 (3.09)	-	-

資料：USDA「PS&D」
「World Agricultural Production」(8 March 2024)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(19 March 2024)

図：カナダの直近 3 か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2024.3.19)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2023/24年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel （ブッシェル） （穀物により異なる）	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

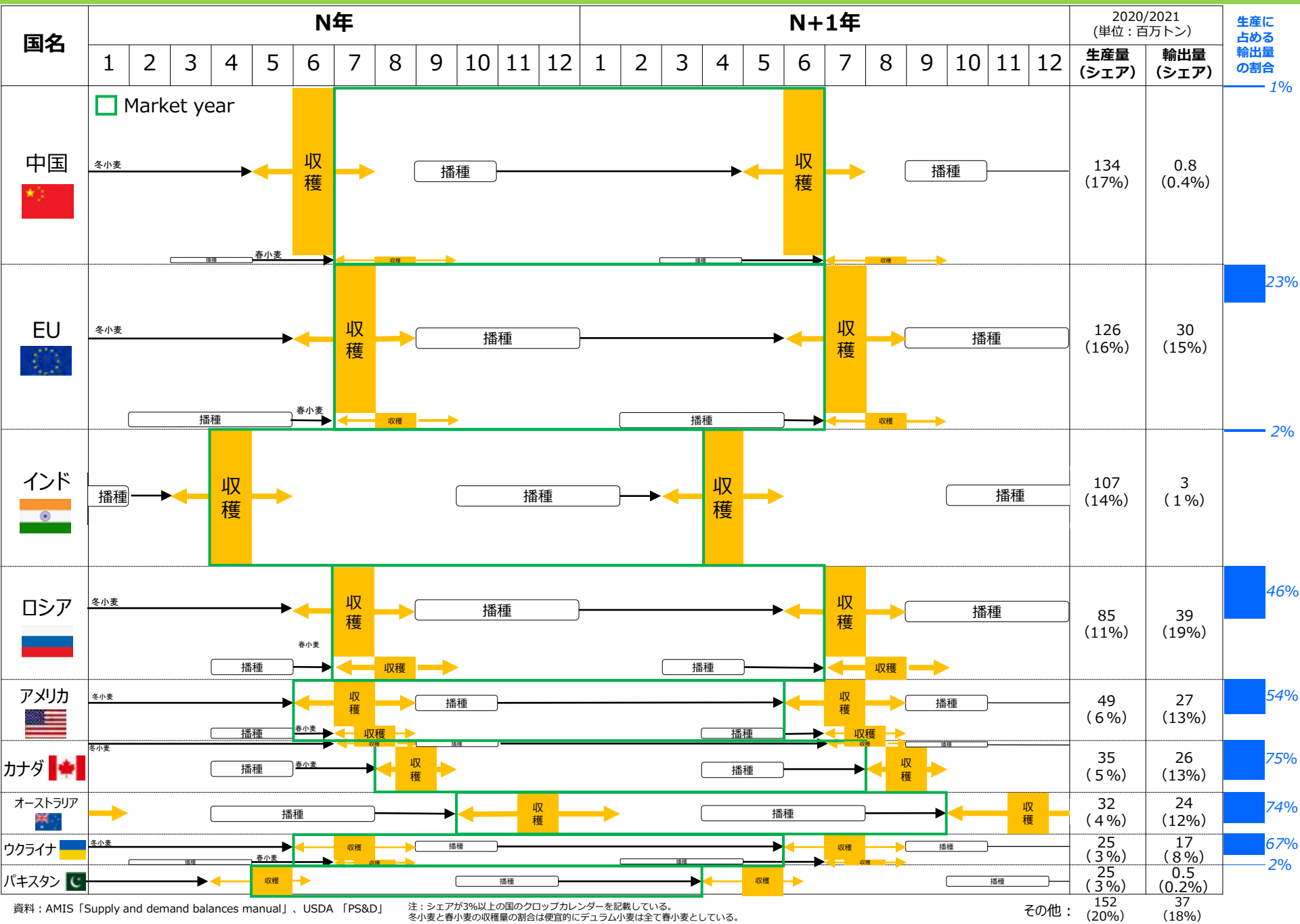
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

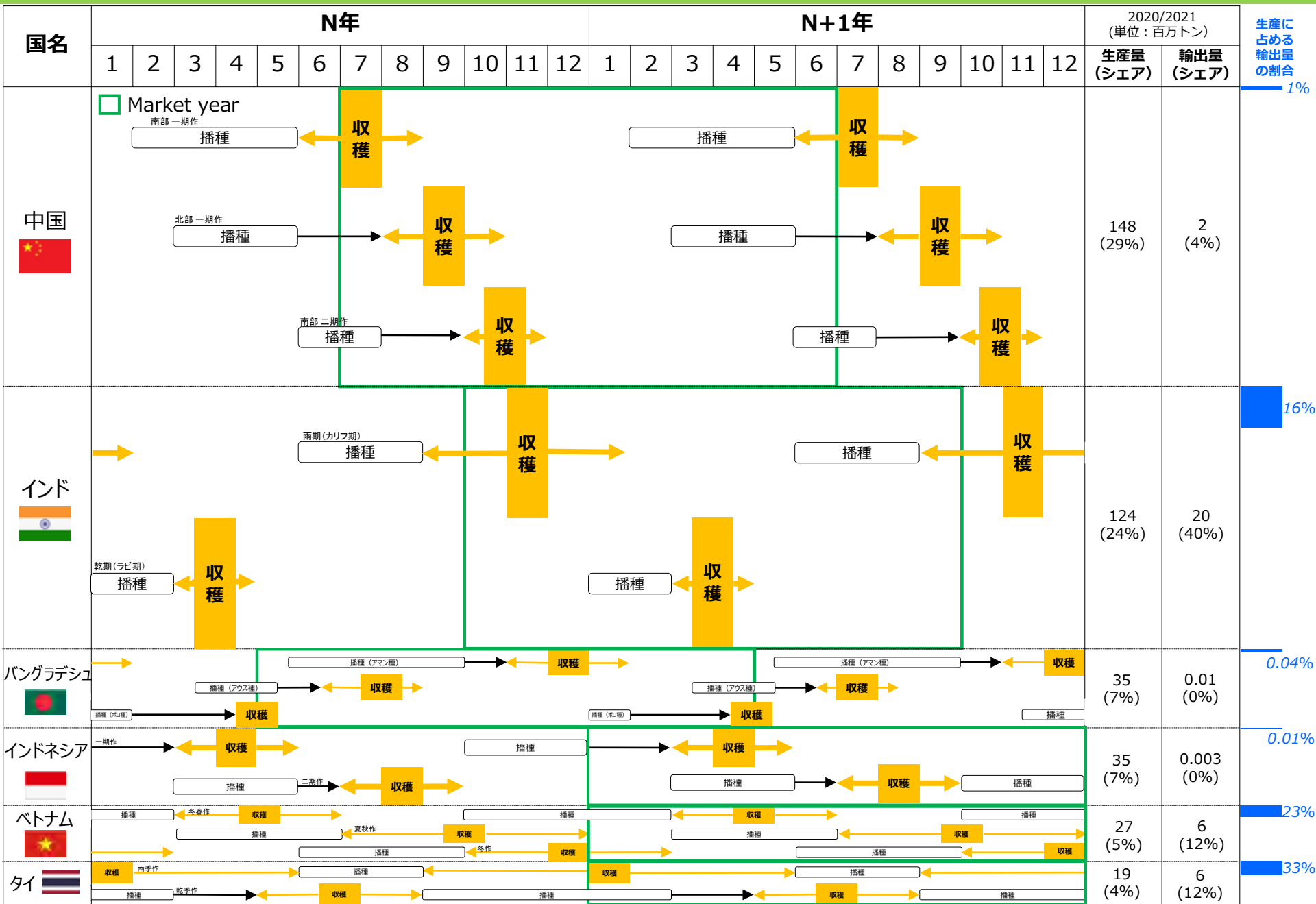
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料 : AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「PS&D」 注 : シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

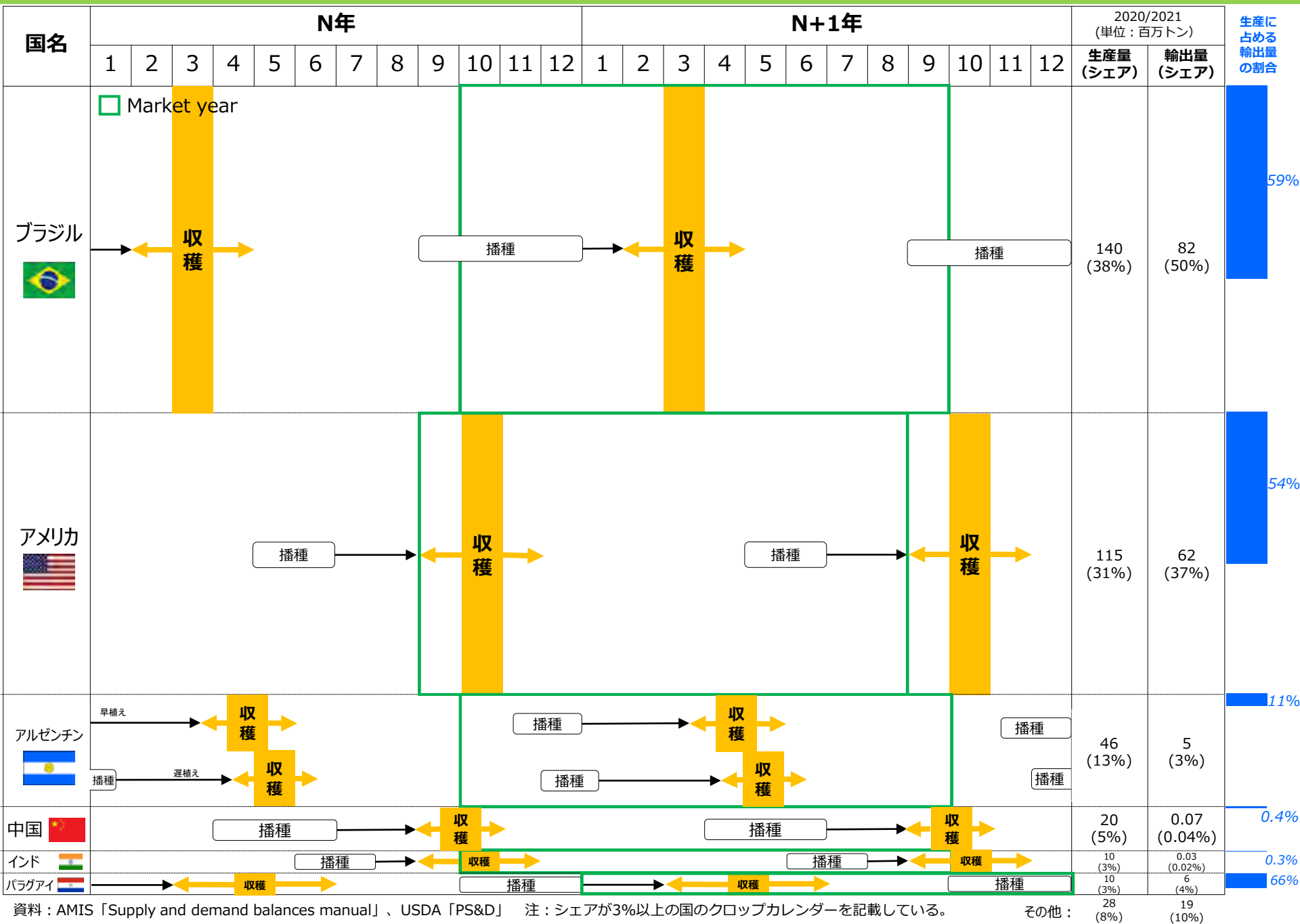
その他 : 121 (24%) 16 (32%)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

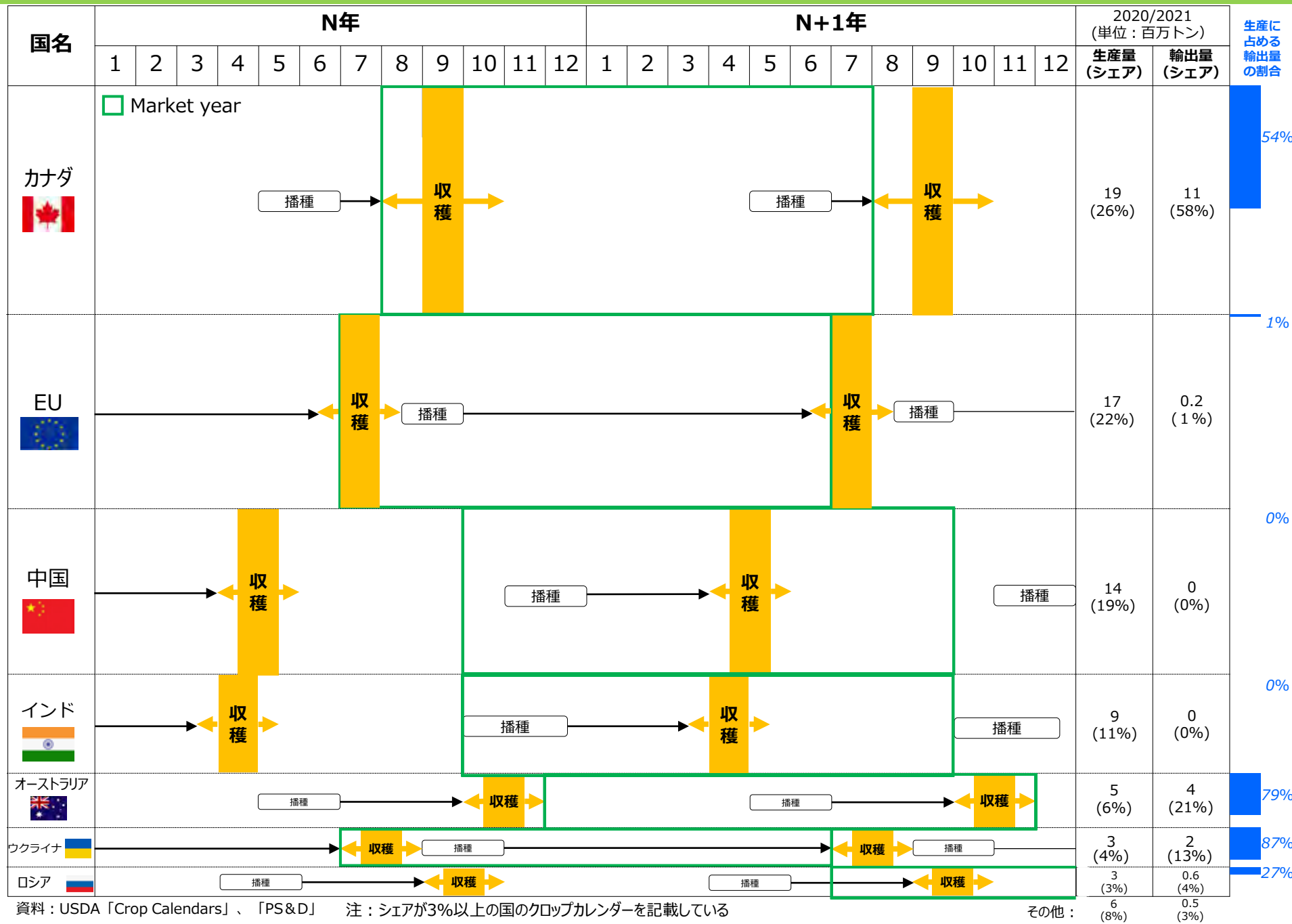
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2024 年 3 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

